禪の信仰

特257
763

始

特257
763

帝國圖書館藏

禪の信仰

丘宗潭著

昭和三年
帝國圖書館藏

照肖畫尙和學球嗣法贊自師老潭宗丘

学任决说

禪の信仰　目次

禪の信仰……一

一、禪の信仰　二、信仰と其の力　三、信仰の力と知識の力　四、信仰の種類　五、自力信仰と他力信仰　六、解信と默信　七、知的信仰と情的信仰　八、內的信仰と外的信仰　九、內的信仰　一〇、外的信仰

釋尊と歸依三寶……二四

一、曹洞宗の本尊　二、歸依三寶　三、翻邪歸正と行道　四、本尊　五、曹洞宗の本尊佛　六、本尊佛釋尊　七、三歸と本尊

兩祖禪師と信仰……五〇

高祖道元禪師　太祖瑩山禪師　要括

成道の釋迦牟尼佛……七三

一、成道の奉祝　二、本門の成道　三、迹門の成道　四、佛教徒の目的　五、成道後の活動　六、佛教徒の祝日

涅槃の釋迦牟尼佛……九六
一、大救世主釋尊　二、釋尊の入涅槃　三、釋尊八相の化儀　四、入涅槃の化儀　五、常住不變の解脱境　六、顯現の妙法　七、有餘涅槃無餘涅槃　八、行持報恩

佛家の三心……一一四
一、佛教徒の奮起を要す　二、菩提心　三、菩提心の功德　四、慕古心　五、慕古心は進新の基礎なり　六、求實心　七、三心即一の妙法　八、當處の一念

聖誕釋迦牟尼佛……一三九
一、調度　二、佛家の調度——三十七菩提分法——　三、佛家の調度——四攝法——　四、佛家の調度——調度としての生死——　五、釋尊應化の降誕　六、釋尊內證の降誕　七、佛恩報謝

湘南禪話……一六一

道の枝折り……一六五
一、信仰　二、思想

この活人劍——我が國策の根本義——……一六八
一、人心不安　二、この不安拭はるべきか　三、朝鮮問題の紛糾と其の來由　四、基督教の烱眼　五、基督教による鮮人何故に亡ぼさるべきか　六、鮮人の光明　七、唯我れ一人のみ能く救護を爲す

禪の信仰

丘宗潭著

一　禪の信仰

明治天皇陛下に「暑しとも云はれざりけり　沸きかへる水田にたてる賤を思へば」と云ふ御製があつたと記憶してゐる。三伏の酷暑だからと云つて惰氣てはゐられぬ、煮えかへる様な田圃で、炎天ぼしになつて働いてゐる民もゐる、脂汗を流して車を挽いてゐる民もある、工場でむれてゐる民もある、商に精を出してゐる民もあるのだからと、勿體なきことながら、陛下は力めて天下の政を致し下されたのであることがこの御製によつても窺ふことが出來る。何んと云ふ忝いことであらう。これを思ふと病後とはいへ衲も安閑とはしてゐられな

い。思ひ通りに體を働かすことの出來ぬのは殘念であるが、せめては筆の上の法話なりと致して、君國に報ゐ、佛祖に報ゐたいものであると思つて、この講話を初めたのである。これは成るべく平易に話して、法の悅びを得て安心決定する人が一人でも多くなる樣にと思つて書くのであるから、これでは平易過ぎると思ふ人も六ケ敷過ぎると思ふ人も、互に讓り合ふてともどもに法の潤を得る樣にと念じて貰いたい。

二　信仰と其の力

禪の信仰の話をこれから段々にして行くのであるが、順序として先づ信仰と云ふことの話から初め樣と思ふ。

信仰と云へば、大概の人にはもう判つてゐることと思ふが、信仰の信といふ字は「まこと」といふ字で、疑心の無いことである。諺に「疑心暗鬼を生ず」といふ。兎角疑心があると物事を誤まる。然う云ふ疑心の全く無いのが信である。仰といふ字は仰欽と熟字する字で仰ぎ欽ふといふ字である。で信仰とは今云ふ所で判る通り、兎の毛ほどの疑心もなく信じ切つて疑はず、かりそめの思ひをせぬことを云ふのである。

この信仰と云ふことには實に恐しい力のあるもので啞に物を言はせ、聾に物を聞かせ、盲に物を見させ、いざりに道を歩かすると云ふ不可思議な力を現はすことがある。昔印度で釋尊が或る村里へ行つて說法されたことがあるが、その時その村からは遠く離れた所に或る男がゐて、釋尊の說法を是非一きたいと思つて急ぎてやつて來た、するとその道に大きな河があつて、とても越えられさうにない、舟もなし橋もないので大變困つた、そこで近所の人を訪ねて河向ふの村に行くのであるが、どうにかして渡ることは出來ぬだらうかと問ふた。問はれた人は戲談半分に、なにこの河は幅こそ廣いが、極淺い河で、水は足の

踝までつくかつかぬ位なものだ、大丈夫だ、渡れるよ、と云つたので、その男はこれを端的に受けて、ずん〳〵その河へ入つて行つた。やはり水は踝の上へは來なかつたと云ふことである。

所がその河の深さはと云へば決してそんな淺瀬ではない、男の身長を二倍三倍しても河底に足が屆きさうにもない河であつたと云ふ。斯ふいふことは何んと云つてよいか、唯不思議と云ふ外はないが、この不思議を現はすことのあるのが信仰の力である。釋尊の說法を聞きたいと云ふ願心から、河の深さを敎へられて、その言をそのままに信じ切つて所志に向つて突進した。果して行くことが出來た。これは全く信仰の不思議な力と云ふ外は無い。

かう云ふことは動もすれば迷信である邪信であると云つて、大抵の人からはお笑草にしてしまはれる話であるが、迷信でも、邪信でもよい、とも角も信には斯ふいふ力があるとして傳へられてゐるその信の力と云ふものを味つて見ることが大事である。

凡そ社會のことは何事によらず、その根本となり土臺となつてゐるものは皆信の力である、信仰の力である。

社會に信仰と云ふものが無ければ、その社會は乍ちに瓦解してしまふ。杜翁は「信仰は人生の力なり、人、生活すれば必ず或るものを信ず」と云つてゐるが、全く信が無ければどうすることも出來ぬ。

三　信仰の力と知識の力

若い人達はどうかするとこの信仰と云ふものを蔑にして、信仰は野蠻時代の殘物か何かでもある樣に云ふ。知識さへ研けば信仰などは全く無用のものであると思つてゐる。これは誠に考の無い話である。

成る程、知識は大切なものであるし、知識を研けば或る信仰は要らなくなる

こともある。これからはよく雷が鳴つて夕立がするが、この雷を昔は雷獸といふ獸が天を騷ぎ廻るのだと云つてゐた、そしてこの獸は蚊張が嫌いだから、雷の鳴る時分には蚊張の中へ這つて香を燒いて、桑原〳〵と云つてゐれば大丈夫だと信じてゐた。所で今日知識が開けて見ると、雷は雷獸が騷ぐのなどではない、空中の電氣の作用であるのだと解つた。而して蚊張は麻布で電氣に感じない性質のものであるから雷の鳴る時にはその中へ入つてゐれば雷が落ちても電氣に觸れぬから安全なのだと解つた。然う解つて見れば、雷を雷獸として恐れたり、それをおまじないで避けたりする信仰などは要らぬことになつた。と云ふ樣な工合で、知識が進めば要らなくなる信仰もある。然し要らなくなる信仰もあるからと云つて凡ての信仰が要らぬのだと考へては大なる誤である。

人間の知識と云ふものは殆ど科學の力によつて出來るのであるが、その科學を研究してゐる人達が今日では、知識を萬能のものとは考へてゐない、知識さへあれば何んでも出來るとは思つてゐない。迦之、知識には知識の根柢、據り所と云ふものが無ければならぬがその據り所とは何かと云へば、矢張り信仰であると云つてゐる。

知識の根柢をなすものは矢張り信仰であると云ふことは、話せば長くなるしまた六ケ敷い理論となるからこれは他日の話にして置くが、兎も角も知識の根柢は矢張り信仰であると云ふことは承知して置く必要があると思ふ。

四　信仰の種類

曩にも述べた通り、信仰とは信じて疑はず仰欽すると云ふことであるが、扨て何を信じて疑はず仰欽するのかと云ふに就いて、色々の種類が出て來る。これから述べることは特に宗教上の信仰のことであるが、魚の頭も信心からと云ふ。卽ち魚の頭を專心に念じてゐるのも信仰である。木の精、草の精を信ずる

のも信仰である。佛を信じ、神を信ずるのも信仰である。信仰には色々の種類がある。種類は色々あるが、どんな信仰であらうと、信仰してゐる當人は、その信仰によつて、それ相應の力を得てゐる。その信仰の力によつて働いてゐる。ここが見逃してならぬ大切の所である。

であるから衲は信仰の種類をあげて、これは迷信だとか、これは正信だとか云ふことを云ふのは止めてその信仰が假令正しいものであらうと、間違つたものであらうと、正信であらうと、迷信であらうと、そんなことにはここでは頓着し様とは思はぬ。それは他日のことにして、ここでは凡そ信仰と云ふ名の付くほどの信仰には一種の様式と云ふものがある。その様式が色々あると云ふことだけを話さうと思ふ。

五　自力信仰と他力信仰

信仰の様式として自力信仰と他力信仰と云ふことがある。

自力信仰とは自分の力で、自己の内に在る所のものを信仰することで、自力信仰の極頂は禪であると云はれてゐる。禪では自分の理解力、自分の實踐力によつて、自分に内在する所の佛、即ち佛性を信じ、これを仰欽ぎて、これを現實に顯現して來るのであるから禪の信仰は自力信仰であるに相違ない。

然し衲は禪の信仰を一途に自力信仰であると云ふのは本當でないと信じてゐる。このことは後の所で委しく述べることであるから、ここには一言斷つて置くにとどめる。

他力信仰とは自分の力は用ひないで、他の力によつて、他にあるものを信仰するを云ふのである。この他力信仰の代表的のものは淨土教や基督教であると云はれてゐる。

この自力信仰、他力信仰では、自力信仰は六ケ敷くて、他力信仰は易いと云

ふことが八ケ間敷く云はれてゐる。

この間も或る人が來ての話に「自力と他力」と云ふ本を見ると、その中に「自力他力合戰、蚤虱の卷」と云ふ一節があつて、面白いことを書いてあつた、卽ち新橋の停車場で蚤と虱とが出會して、蚤は虱に貴樣ほど世の中にしみつたれた奴はない、ろくざま逃げることも知らぬでは無いか、と侮辱した、すると虱は、然らばここで孰らが偉いか力だめしの競走を致さう、この新橋から淺草の觀音樣へ、どちらが早く到くか行つて見樣ぢやないか、と云ひ出した。話はまとまつて蚤は淺草指してブイッ〳〵と飛び出し、虱は後からノソ〳〵と出かけた。然し虱は考へた、唯ごとではとても蚤にはかなはぬから、何かのお扶にすがらうと。早速そこを通りかかつた人の裾の端にとまつた。蚤は自分の力でどん〳〵飛んで行つたが、人の足には及ばない、虱が淺草の觀音堂へ着いてから一週間目に、やつと蚤は到着したとあつた。自力は難行、他力は易行とはこの邊のことを云つたものでせうか、と云ふことであつたが自力他力の難易はまあそんなものであるかも知れん。

六　解信と默信

また信仰の樣式に解信と默信と云ふことがある。これは自力信仰と他力信仰とのことを別な言葉で云ひ表はしたものだと云へないこともないが、自力他力の方は自分の力、他の力と云ふことを主として區別してあるのであるが、この方は自分の力、他の力と云ふのではなくて、自分の智慧の力を賴にするのと賴にしないのとに依つて區別したものである。

卽ち解信と云ふのは佛なり神なりを自分の智慧でよく理解して少しも疑ふ所のないのを云ふのである。

西洋にも中世紀時代に出た人で「合理的なるが故にこれを信ず」道理によく

かなつてゐるから私はこれを信ずるのだと云つた人があると云ふことであるが、今日は大抵の人の信仰はこの解信である様である。

默信と云ふのは、信じ様とすることが道理にかなつてゐ様が、ゐまいが、そんなことには頓着なく、只一途に信じきる信仰で、「道理にかなつてゐなければこそ私は信ずるのだ」とさへ云ひだしかねぬ信仰である。ヘブライ書に「望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑依とする」と云つてあるが、自分に切迫つまつた要求があつて、寢ても立つてもゐられないと云ふ時には、その要求にのみ心を寄せて、苦しい時の神頼み、神があつても無くても遮二無二神にすがりつく、これが默信である。默と云つたのは智慧が眼をつむつて、やることで道理があつても無くても何んとも云はない所から名づけたのである。

七　知的信仰と情的信仰

信仰の様式にまた智的信仰と情的信仰と云ふのがある。

これも大體から云へば、自力信仰と他力信仰、解信と默信と云ふのと同じであるが、その名が異るだけ多少異る所がある。

卽ち自力信仰と他力信仰は自分の力を主とする信仰か、他の力を主とする信仰かと云ふことの區別であり、解信と默信とは自分とか他とかと云ふことは兎も角、知識の眼で見てそれから信ずるのと、知識の眼は用ひないで信ずるのとの區別である。

それからこの知的信仰と情的信仰は知識の眼で見た上の信仰と情の力で摑んだ所の信仰と云ふのであるから、解信と默信の區別とよく似てはゐるが多少異つてゐる。

以上で大體、信仰の様式として能く云はれてゐる所のものを述べ盡したのであるが、納はそれらの様式の外に最も重要な様式があることをこれから話した

いと思ふ。

その様式とは内的信仰と外的信仰と云ふ様式である。

八　内的信仰と外的信仰

この内的信仰と外的信仰と云ふ様式はどこの宗教にでもなければならぬ様式であると思ふが、禪の信仰殊に曹洞宗の信仰にはこの二つが並立してゐなければならぬのであるから、禪の信仰を述べるに先達つて特にこの話を致すのである。

内的信仰とは人々各自が本來具有してゐる所の神なり佛なりに憑依る信仰で、外的信仰とは自分以外にある神なり佛なりに憑依る所の信仰である。

我が曹洞宗に就いていへば、何が内的信仰で、何が外的信仰であるかと云へば、人々が本來具有してゐる所の佛性に憑依るのか内的信仰で、釋迦牟尼佛を

禮拜し恭敬するのが外的信仰である。

九　内的信仰

今日の我が曹洞宗ではこの内的信仰が盛んに行はれて、外的信仰の方は段々薄らいで行く様である。我が宗門の學者を初め居士大姉善男善女、中でも若い人達は外的信仰を全く持つてゐないと云つてもよい位である。

この人達は内的信仰ばかりを重んじて、内的信仰でなければ禪でない様に思つてゐる。

内的信仰ばかりを重んじて、外的信仰を殆ど無視してゐるのだから、その人達は銘々が天上天下唯我獨尊、世に自分ほど偉いものはないと思ひ込んで、釋迦何人ぞ、前に禮拜すべき釋迦なく、後に恭敬すべき彌勒なし、と云ふ様なことを寝ても醒めても云つてゐる。

成るほど、それも道理のあることで、天上天下唯我獨尊の境地に住するのが禪の極地である。長沙と云ふ禪師は盡十方世界沙門の一隻眼と云つたことがある。世界中が俺の眼の玉一つだ、山川草木、人畜鳥魚は悉くこの眼玉の相だ、と云つたのであるが、この宗意を會することは六ケ敷いにしても、兎も角も自己に優る一物も認めてゐないことは誰にでも解ることである。

今云ふ通りの立場から云へば、佛を安置して禮拜するとか、菩薩を請じて供養するとか云ふことは感心すべきほどのことで無いと云ふことにもなる。

然しここで各自が忘れてならぬことは「外に禮拜すべき佛なく、恭敬すべき菩薩なしと云ふ時は、佛菩薩を足蹴同様にして、自分獨りが太尊貴生をきめ込んでゐる時ではない、外に禮拜すべき佛も恭敬すべき菩薩も見ぬ時は内に自分と云ふものをも全く立てない時でなければならぬのである」と云ふことである。自分一人が高くとまつて、佛菩薩を蔑にすると云ふ様なのでは、それは内的信仰でも何でもないのである。

この趣きを　高祖道元禪師は「現成公案」の中に「佛道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするといふは、萬法に證せらるるなり。萬法に證せらるるといふは、自己の身心、および他己の身心をして脱落せしむるなり」。と示されてゐる。佛道をならふ卽ち佛法を信仰すると云ふことは、自己を信仰することである。自己を信仰すると云ふは自己を忘るることだ。自己を忘るると云ふは萬法と如同になることだ。萬法と如同になると云ふは自分だ他人だと云ふ邊際をたてないで自分は自分、他人は他人、としての面目を現成して行くことであるのだ、と丁寧に示されてゐる。

であるから我々はこの旨を能く味つて、自分一人が天下であると云ふ様な考を持たぬ様に致さなければならぬ。然しこの旨は容易に味ひ盡くされるもので

ないから、内的信仰をのみ重んずる人は兎角、自分一人よがりの増上慢人になつてしまい易いのである。

乃で納は常に自らも誡め、人にも話してゐることであるが、曹洞宗の禪を本當に體得し行取つて行くには内的信仰ばかりでは六ケ敷い、是非とも外的信仰を内的信仰に兼ね合せて行かなければならぬのである。

一〇　外的信仰

我が曹洞宗の外的信仰と云へば、先にも云つた通り釋迦牟尼佛を本尊とし、この一佛に禮拜恭敬することを云ふのであるが、然しこれには異説のあることであるから、少し丁寧に話して置かなければならぬ。

異説の重なるものは二つあつて、その一つは外的信仰が我が宗門で大切なることは云ふまでもないが、然し釋尊一佛だけを禮拜恭敬すると云ふに限つたことは無いと云ふのである。それから今一つは禪門に外的信仰などがあらう譯がないと云つて外的信仰を全く無し様とするのである。

曹洞宗の外的信仰が、釋尊一佛を禮拜恭敬するに限つたことはないと云ふ説の重なる據り所は　高祖道元禪師が「歸依三寶」の中に「しるべし三歸（佛と法と僧とに歸依すること）の功德、それ最尊最上甚深不可思議なりといふこと、世尊すでに證明しました、衆生まさに信受すべし、十方の諸佛の名號を稱念せしめましまさず、ただ三歸をさづけます、佛意の甚深なる、たれかこれを測量せん、いまの衆生いたづらに、各々の一佛の名號を稱念せんよりは、すみやかに三歸を受けたてまつるべし、愚闇にして大功德をむなしくすることなかれ」と示されてゐる、この數行の文字にある様である。が然し、納はここで、その異説をなす人と共に、この數行の文字を繰り返して拜誦して見たい、繰り返して味つて見れば見るほど、この文字には深い思召しが含まれてゐることが

判つて來る。卽ち高祖道元禪師がこの垂誡を致されたその時代を考へて見れば判ることであるがその當時、高祖道元禪師の行かるる所には、一所として念佛が榮えてゐない所はなかつた。この念佛が惡いといふ譯ではないけれども、高祖道元禪師の思召から云へば、念佛宗の人達が內的信仰を持たずに、外的信仰にのみ沒頭してゐるのを快く思はれなかつた。乃で外的信仰を誡めて、內的信仰を盛んに示されたのである。高祖道元禪師の誡を拜覽するにその時代と云ふものを見ることを忘れてはならぬ。恰度今日曹洞宗の多くの人達が內的信仰にかたよらうとしてゐると同じ樣に、その當時の人達は外的信仰にばかりかたよらうとしてゐた時代であつたから、その時弊を矯むるがために　高祖道元禪師は「歸依三寶」の中に上云ふ樣に示されたのである。

衲は斯う信じてゐるが、衲が深くこれを信じてゐるに就いては澤山の據所がある。今その一二を云つて見れば、曹洞宗で最も大切に致す所のものは「三物」と云つて血脈と嗣書と大事とであるが、その三物のどれを見ても釋尊が常にその中心になつてゐる、釋尊に統一されてゐる。また「眼藏」には「諸佛とは釋迦牟尼佛なり」とも云つてある。「諸佛とは釋迦牟尼佛なり」と云ふこの一句をよく味つて見るがよい。我が宗の外的信仰の本尊が釋尊であることは云ふまでもないことであることが解る。この一句には「諸佛菩薩その數は澤山あるけれども、突きつめて見れば結局釋迦尼牟佛であるのだ」と云ふことが示されてゐるのである。

それから今一つの方の曹洞宗には外的信仰などは無いと云ふ說も全く據り所の無い說ではない。高祖道元禪師は常に自分の智慧、自分の實踐を重じ所謂內的信仰を隆に說いてゐられる。能く世間に知られてゐる「學道用心集」の中にも「若し行に依らずして證を得ば誰か如來迷悟の法を了せん、識るべし行を迷中に立てて證を覺前に獲る」何んでも行に依らなければ、自分の力によらなけ

れば、と云つてゐられる。

これらの文字を見れば成るほど曹洞宗には外的信仰の必要などは無いのかとも思へないことはない。然し同じその高祖道元禪師の「學道用心集」に「大師釋尊、唯無上菩提を以つて衆生を誘引するなり」と云つてある。衆生は矢張り釋尊に導かれて證を得る、卽ち衆生は釋尊を恭敬禮拜してこそ、自分の力を働かす方法をも誤らぬのである。

で上述する所を要するに、曹洞宗には内的信仰が大切であることは云ふまでもないが、それに兼ねて外的信仰が大切のものである、而してその外的信仰の對象は釋尊一佛であると云ふことに歸するのである。

尙これより進んで曹洞宗の信仰は内的外的とどこまでも分れてゐるものでなくして、その信仰の醇熟すると共に、感應道交の不可思議力によつて内外融合一味の大信大行が現成することを話さなければならぬのであるが、これは次回の講話に讓ることに致さうと思ふ。

釋尊と歸依三寶

一　曹洞宗の本尊

前回は「禪の信仰」といふ題で、信仰上の種々のことを話したから、その連續として今回は信仰が醇熟すれば、どういふ妙德があらはれるか、どういふ不可思議力があらはれるかといふことを講ずるつもりであつたが、それを講ずるには、前以つて話して置かなければならぬ大切なことがある。で今回はその大切なことをお互が十分に納得の出來る樣に先づ致したいと思ふ。

その大切なことといふのは我が曹洞宗の本尊のことである。

我が曹洞宗の人達の中には、釋尊が本尊であるのか、觀音が本尊であるのか、地藏、藥師、彌陀、大日、何佛、何菩薩が本尊であるのか、分らずにゐる人が

ある樣である。

また我が宗の人達の中には、我が宗には他宗他門の樣に一佛一體の本尊は無い、我が宗の尊重し恭敬する所のものは、三世十方の諸佛、天地法界の諸法、十世古今の諸僧、これである。佛として尊重せざるなく、法として尊重せざるなく、僧として尊重せざるなく、佛法僧の三寶悉くを尊重し恭敬するのが我が曹洞宗である。一佛一體を取り分けて尊重し恭敬するのは他宗他門ですることで、我が宗ですることではない、といふ人がある。

その他樣々のことを云ふ。

斯ふいふ工合で、或る人達は本尊が何であるのかを知らずにゐる、また或る人達は本尊は無いのが本當だといふ。一宗一派の曹洞宗に斯ふした異說のあるのは妙なものである。

我が宗門は崇高な宗旨であるだけに惑はされ易いことが往々ある。僧侶も信

者も、自分勝手な思惑を有つてゐることが多い、これは甚だ好ましからぬことである。吾々はこの勝手な思惑や卑見愚見を捨て、高祖道元禪師の示誨や行蹟、並びに太祖瑩山禪師の示誨や行蹟をまともに信奉じて、總てを決著して行きたいものである。

これより致さうとする本尊の話も、兩祖禪師の示誨行蹟を典據として、的確とその筋目をたてたいと思ふ。

二　歸依三寶

我が曹洞宗の本尊の話をするには、歸依三寶といふことから話してかからなければならぬ。

といふのは、この歸依三寶といふことは我が宗で非常に重んぜられてゐることで、曩にも一言した樣に、人によつてはこの歸依三寶が宗門で何よりの大切のことで、これさへあれば殊更に本尊をたてる必要などは無いのだとさへいふからである。加之、事實この歸依三寶といふことは高祖道元禪師初め非常に貴まれたことで、禪師には「歸依三寶」の卷といふ撰述があつてそれには歸依三寶の大切なこと、その功德の廣大なことを說かれてゐるからである。

歸依三寶といふことを講ずる便宜のために衲は「歸依三寶」の卷の大要を話したいと思ふ。「歸依三寶」の卷には「歸依三寶」とは三寶に歸依するといふことである。三寶とは佛と法と僧との三つをいふ、この三つは金剛珠玉の如くに貴いものであるから寶の字を加へて三寶といつたのである。歸依とは歸投依伏と熟字する字で、つまり尊重恭敬することである。何故三寶を尊重するかといへば佛は師であり、法は規則であり、僧は友であるからである。この世には苦惱が滿ち、恐しい波風が立ちとほしてゐるが、然しこの波風をのり切ることを敎ふる師があり、規則があり、友があつたならばいかに、心丈夫なことであらう。

吾々は動もすれば「苦しい時の神だのみ」で、いかかはしいものに祈願をする、木の精、草の精、狐、狼、むしけらにまで祈り憑らうとする、そうしてその苦を蟬脱やうとするが、然しそんなものに祈つて益のある筈が無い。それよりか、三寶によりすがるがいい。三寶は師であり、規則であり、友であるのだから、必ずよりすがつただけのことはある。善きにつけ、悪しきにつけ、無くてならぬものは佛法僧の三寶である。だから幸にこの三寶あることを知り得た人はその好因縁を悦んで、至心に三寶を尊重するがいい」。と誨へ、その最後には「おほよそ佛子行道、かならず先づ、十方の三寶を敬禮したてまつり、十方の三寶を勤請したてまつりて、そのみまへに焼香散華して、まさに諸行を修するなり。これすなはち古先の勝躅なり、佛祖の古儀なり。もし歸依三寶の儀、いまだかつておこなはざるは、これ外道の法なりとしるべし。または天魔の法ならんとしるべし。佛佛祖祖の法はかならずそのはしめに歸依三寶の儀軌あるなり」。と示されてゐる。

歸依三寶の大切であることはこれによつて明瞭である。歸依三寶は古先の勝躅、佛祖の儀軌である。若し三寶に歸依せぬならば、それは佛法を信ずる人でなくして、外道天魔であるのである。歸依三寶の大切であること、歸依三寶の功德の廣大であることはこの「歸依三寶」の卷等によつて能く會得すべきである。

三　翻邪歸正と行道

歸依三寶は大切である。その功德は廣大である。然し歸依三寶が大切であり、功德が廣大であるといつたからとて、これ以上には歸依すべき導師もなく、尊重すべき宗主もなく、禮拜すべき本尊もないといふのではない。「歸依三寶」の卷に、歸依三寶の貴いことは力一杯に高潮してあるけれども、歸依三依さへすれば、特に恭敬禮拜すべき本尊佛は立てなくもいいとは一言も云つてない。こ

丶はよく注意しなければならぬ所である。

ここに注意をしない人は歸依三寶の貴いことだけを知つて、更に恭敬禮拜すべき大切な本尊佛のあることを閑却してゐる。閑却してゐる所ではなく、却つて本尊佛を立てるのを批難する。本尊佛などといつて一佛一體に歸依するよりは三世十方の諸佛、天地法界の諸法、十世古今の諸僧、これに歸依する方が、どれだけいいか判らぬ。高祖道元禪師も「歸依三寶」の卷の中に「いたづらに、各々の一佛の名號を稱念せんよりは、すみやかに三歸をうけたてまつるべし。愚闇にして大功德をむなしくすることなかれ」。と示されてゐるではないか、と云つて批難する。然しこれは批難する人の間違ひである。どう間違ひであるかと云へば、この人は歸依三寶といふことの本當の謂を知らない、事を大局から見ることを忘れてゐる。これが抑々の間違ひである。

歸依三寶といふことの本當の謂を知るには歸依三寶に二種あることを知らなければならぬ。二種とは翻邪歸正の三歸と重受恭敬の三歸とである。

翻邪歸正の三歸とは邪教を信じてゐたものが、その邪教を棄て、邪心を翻へして、正教卽ち佛道に入るといふのである。佛法僧の三寶に歸投依伏するをいふのである。

いつて見れば翻邪の三歸は改宗式である。入門式である。耶蘇教の洗禮の樣なものである。であるから苟しくも佛教と名のつく宗派であるならば、どの宗派でも皆この歸依三寶の儀は行ふてゐる。「法苑殊林」には「邪を信ずること日久しうして今、創めて心を易へ正に歸す。佛先づ三歸を受けしめて後ち、始めて懺悔せしむ。是れを翻邪の三歸と名づく、故に智度論に曰く「先づ三歸を受けて後ち、始めて懺悔すと」。と云つてある。

重受恭敬の三歸といふのは既に佛法の信者となつてゐる人が、何かの式を行ふ時に、重ねて三歸を受けることをいふのである。智度論にも「若し久しきよ

りこのかた、佛を信ずれば、先づ三歸を受くるをも須ひず（中畧）懺悔し已つて後に三歸を受く」。とあるはこのことである。

以上いふが如く、歸依三寶に二種の別がある。而してこの二種ある中で、何づれが主であるかといへば云ふまでもなくそれは翻邪歸正の三歸である。卽ち翻邪歸正の三歸は佛教信者と外道天魔とを分つ分水嶺である。翻邪歸正の三歸を致したものは佛教信者であるのであるが、それをなさないものは外道である。かるが故に釋尊は常にこの翻邪歸正の三歸といふことを重んじ、教を求むるもののある毎にこれを行はしめてゐられる。その法の流を酌んでゐる佛教の各宗各派はまた一樣にこの翻邪歸正の三歸を行ふてゐる。淨土宗でも翻邪歸正の歸依三寶をする、日蓮宗でも翻邪歸正の歸依三寶をする、その他どの宗派でも行つてゐる。

が然し釋尊を初め各宗各派で、この翻邪歸正の歸依三寶を行ふからそれ以外には何ん等の行持をも致さないかといふに、決して然うで無い。釋尊は既に翻邪歸正を致したもののために四諦十二因緣八正道といふ正法等を說き示して、これを行する樣になさしめられた。淨土宗では翻邪歸正の三歸を致した上で、彌陀一佛一體を禮拜する。日蓮宗では翻邪歸正の三歸を致した上で七字の題目を稱念する。卽ち翻邪歸正を致した上で、各々その宗派に於て宗主とする所、本尊とする所のものを尊重し恭敬するのである。我が曹洞宗だけが、翻邪歸正の三歸をするだけで、その外には別に尊重すべき導師もなく、禮拜すべき本尊もないといふ筈が無い。

高祖道元禪師に「いたづらに各々の一佛の名號を稱念せんよりは、すみやかに三歸をうけたてまつるべし」。といふ示誨はあるけれども、これは前回の講話でも述べた通り、一佛一體を本尊として尊重し恭敬し稱念するのが惡いといはれたのでは無い。高祖道元禪師出世時代の佛教各派が宗弊となつてゐた所の偏

執を破せられたのである。

或る宗では彌陀の一佛一體の名號をのみ唱念し、彌陀一佛の誓願德用をのみ力説せぬ宗派のことを佛門では無いかの様に云ふ。また或る宗では大日一佛一體をのみ尊重し、その甚深秘密の法を高唱するそうして大日一佛一體を尊重せず、その秘密法を讃仰しないものを顯教淺劣の輩と蔑む。どの宗もどの宗も各々その宗の一方に偏つて、歸依三寶といふ佛法の通則の上に立つてゐることを忘れ、佛教といふ大精神の上に各々の宗派があるのであることを忘れ、同一佛法中にありながら、互に爭を構へ、相破を事とする。このあさましい有様を見られた高祖道元禪師は痛くこれを憂ひて、各宗各派の別はあつても各々は等しく佛子であるぞ、佛子たるものは自分の宗とする所にのみ偏執するの非を捨て、自他共に歸依三寶の古儀に則り佛教の通儀を踏まなければならぬ、歸依三寶を忘るる勿と門下の人達を誡められたのが「歸依三寶」の巻のこの文である

のである。この邊の親切なる思召を考へないで、高祖道元禪師は何んでも歸依三寶さへすればいいのだと仰せになつた様に思ひ、歸依三寶といふことが我が曹洞宗の全體であるかの様に思ふのは實に寒心すべきことである。

これを要するに歸依三寶といふことは非常に大切なことであるには相違ないが、これは翻邪歸正の意味を徹底し、各宗各派の別はあらうとも、同じく佛法中の人である外道ではない、同行佛道者であるといふ心持を有つて行く上に最も重要なことであるのであつて、これさへ行へばもう何も行ふことがないといふのではない。卽ち歸依三寶は佛法に入ることを誓願する行持であり、また入つて後ちにもその初願を忘れない様に致して行くための行持である。これさへ致せばそれでよいといふのでは無い。佛法中に入れば佛法中の行持がある。卽ち淨土宗の人は三歸をうけて入門し、入門して後ちに專心に彌陀一佛一體を禮拜恭敬する、日蓮宗の人は三歸をうけて入門し、入門して後ちに、專ら妙法の

題目を唱念する。各宗各派皆それぞれに三歸をうけて後ちに、その宗の本尊を唱念し恭敬尊重する、斯様にして各々その道に精進するのである。

四　本　尊

これまでの所で、歸依三寶は佛教の通則佛祖の古儀であることを述べた。各宗各派ともに、この通則古儀を行ふた上に、その宗その宗が本尊を仰ぎてゐることをも話した。

これよりは進んで、我が曹洞宗の本尊を話さなければならぬのであるが、それに先きだつて、本尊といふことの本當の意味を的確と話して置きたい。

本尊のことを講じてある經論は隨分澤山ある。然しその中で、衲は「演密鈔」の解釋が一番判りがよいと思ふ。この鈔には「諸聖、行者もと宗主とする所に隨ふ故に名づけて本尊となす」と云つてある。卽ち佛法を信ずる人達はその思ふ所に隨つて、諸佛諸聖の中のどの佛をなり尊重し恭敬する。その人達の尊重し恭敬する佛はその人達の本尊であり、この人達の尊重し恭敬する所はこの人達の本尊であると云つてあるのである。

「法華方便品」の中には「無量の衆に尊まれて、ために實相の印を說く」。と釋尊は云つてゐられるが、この無量の衆に尊まれてゐられる釋尊は卽ちこの無量の衆の本尊であるのである。

であるから、どの宗派にもせよ、その宗派の僧侶並に信者が一樣に、最尊最勝の宗主と仰ぐ所のものが、その宗派の本尊である。淨土宗では彌陀如來を最尊最勝の宗主としてゐるから、彌陀如來が淨土宗の本尊である。日蓮宗では南無妙法蓮華經の七字を最尊最勝の宗主としてゐるから、この七字が日蓮宗の本尊である。眞言宗は大日如來を最尊最勝の宗主としてゐるから、大日如來が眞言宗の本尊である。而うして我が曹洞宗の最尊最勝の宗主とする所のものは何

んであらうか、本尊は何んであらうか。我が曹洞宗が淨土、日蓮、眞言、天臺でなく、諸宗の外に卓爾として立つてゐる以上、その最尊最勝の宗主とする所のものが無ければならぬ、卽ち本尊が無ければならぬ。我が宗の最尊最勝の宗主、本尊は何んであらうか。

五　曹洞宗の本尊佛

前に既に述べたことであるが我が曹洞宗のは、その宗主とする所は歸依三寶である、このほか別に本尊のある譯が無いといふ人がある。然しその人達の思つてゐることは正しくない。その人達は歸依三寶の貴いこと、廣大な功德のあることは知つてゐるが、この歸依三寶が何故に貴いのか、如何なる意味の功德が廣大であるのかを知らずにゐる。繰り返していふが歸依三寶の貴いのは主として改宗の誠意をこれによつて表はすことが出來るからである。改宗の誠意を曇らさない樣に、いつまでもいつまでも改宗當時の初發心を持つことが出來るからである。であるから歸依三寶さへすれば、もうそれ以上に、何一つすることが無いといふのでは無い。大奮發して學校へ入學した、入學式は濟んだ、入學をしたから、もうそれ以上に何もしなくていいか、といふに決して然うでない、することはこれからである。佛法に改宗した、入門したといつても、もうそれですることは無いといふ樣な考の間違つてゐることは云ふまでもないことである。

學校に入學したものは盛んに勉强しなければならぬ、佛法に入門したものは大いに信心を養成しなければならぬ。佛行を行じなければならぬ。

信心を養成し、佛行を行ずる上に、最も大切であるものは本尊である。吾々はこの本尊を目的とし、この本尊に導かれて、生死の大海を航するのである。波風の高い世を渡るのである。

然らば我が曹洞宗の本尊は何んであらうか、釋尊か、妙法か、僧衆か、觀音、大日、彌陀、藥師、地藏、不動、何んであらうか。

これに就いては種々のことがいはれてゐる。或る人は釋尊であるといひ、或る人は妙法であるといふ。また或る人は觀音だ、藥師だといふ。

斯樣にいふが、我が曹洞宗の本尊は釋尊である。妙法でも、僧衆でも、觀音でも、藥師でもない。我が曹洞宗の本尊が釋尊であるといふことは以下漸次講じて行くが、それに先き達つて、我が宗の本尊が妙法ではないといふことだけをここに述べて置かう。これは可なり勢力のある說であるから特にそれを難じて置かなければならぬのである。我が宗の本尊が妙法であるといふ說は　高祖道元禪師の「辨道話」や御一代の行蹟に基いてゐる說である。辨道話に「諸佛如來妙法を單傳して云云」と劈頭に示してある。この妙法とは卽ち人々各自が本來具有してゐる恁麼のことである、正身端坐の坐禪によつて了得される所のもののことである。成るほどこの恁麼は我が宗の最も貴ぶ所のものである。然しこれを直ちに本尊といふことは出來ない。これは前回の講話「禪の信仰」の中で話して置いたことであるから、悉しく云ふにも及ばぬが、今度は少し變つた方面から說いて見やう。學問上の言葉に將成態と現實態といふことがある。云ふまでもなく、將成態とはこれから成就するものをいふので、現實態とは今現に成就してゐるものをいふのである。いつて見れば將成態とは生れ出ない水兒のことであるし、現實態とは生れ出た小供若しくは大人のことである。今吾々が自分の本尊、世を渡る導師として仰がうとするのに、生れ出ないものと、既に生れ出たものと、どちらがよいか、心丈夫かといへば、答ふるまでも無いことである。これは勿論譬ではあるが、本具の恁麼を本尊とするか、既に成就された釋尊を本尊とするかといふのには、斯ふ云つた樣な趣きがあることを忘れてはならぬ。で衲はこの本具の恬麼を決して輕んずるのでは無いが、それを

重んずると共に、釋尊を本尊として仰がなければならぬといふことを力説するのである。

六　本尊佛釋尊

我が曹洞宗の本尊佛は釋尊である。種々の異説があるに拘はらず、衲は斯ふ斷言する。

この斷言を敢へてするのには種々の論據のあることであるが、纖細い理論に渡るものは廢めて、誰の心にも解し得られるものをあげることを致さふ。

我が宗に於いて「修證義」といへば唯一人知らぬものは無いが、その修證義の末節に「過去現在未來の諸佛、共に佛となる時は、必ず釋迦牟尼佛となるなり」。と云つてある。この文字をよく味つて見るがいい。過去現在未來、三世十方の諸佛が、佛に成るといふ時に、何佛になるのかと云ふと、彌陀佛となるのでもない。大日如來となるのでもない、釋迦牟尼佛となるなり、といつてある。卽ちこの文字によつて、三世十方の諸佛は皆本當の佛ではない化佛である、釋迦牟尼佛の妙德を現はすがために、衆生の根機に應同して出現された化佛であることが判る。化佛であるから貴くないといふのでは無いけれども、佛法の總府といはれてゐる我が曹洞宗の本尊は本佛でなくして化佛であると信ずることが出來ぬ。佛法の總府たる曹洞宗の本尊は釋迦牟尼佛でなければならぬことは云ふまでもないことであるといはなければならぬ。

また我が宗には三佛會といつて、釋尊の降誕會と成道會と涅槃會とがどの法會よりも重大な法會になつてゐる。これは釋尊を本尊と仰げばこそ行はれることであつて、釋尊以上に尊重する佛があるならば、それを措いて、釋尊の法會だけを三度も莊嚴に行はれる譯がない。三佛會にそれ〳〵特有な嚴肅な法式が營まれる樣になつたのは恐らく太祖瑩山禪師からであらうが、然し　高祖道元

禪師の時にも、この三佛會は非常に大切にされたことが、永平廣錄等に歷然と記されてゐる。高祖道元禪師は何か重要な法會の時には必ず上堂といつて、須彌壇の上へ昇つて、法を說かれたのであるが、その上堂の話を記してある「廣錄」の要所要所は殆ど皆この三佛會の時に示された法話であるといつてもいい、位である。これらによつていかに、兩祖禪師を初め我が宗で三佛會を重じたかといふことを知ることが出來る。これを以つても我が宗が如何に釋尊を尊重恭敬してゐるか、最尊最勝の宗主としてゐるか、本尊としてゐるかを知ることが出來る。――最もこの三佛會が全く他宗には無いといふのではない、降誕會灌佛會といふものは印度には舊くから行はれてゐた、涅槃會も可なり古くから支那日本に行はれて居た、然し降誕會、涅槃會、成道會の三つが共に行はれ、而も最も重要な法會となされ來つたのは我が宗ばかりである。――更に進んで、高祖道元禪師が、いかに釋尊を大導師と仰ぎ、最勝最尊の宗主と仰ぎ、慈父と仰ぎ　本尊と仰ぎ、その行跡を踏まん事を欣はれたかを見る一斑として、衲は「大清規、赴粥飯法」の中の文を引きたい。その中には「遙に西天笠の佛儀を尋ぬるに、如來及び如來の弟子、右の手をもつて飯を摶めて食す、未だ匙筯を用ひず。佛子須く知るべし、諸天子及び轉輪聖王、諸國王等、また手を用つて飯を摶めて食す。當に知るべし、これ尊貴の法なり。西天笠の病比丘のみ匙を用ふ、その餘は皆手を用ふ。筯は未だ名をも聞かず、未だ形を見ず。筯は偏に震旦(支那)以來、諸國に用ひらるのみ。今これを用ふ。土風方俗に順ずるなり。既に佛祖の兒孫となる、佛儀に順ずべしと雖も手を用つて飯する、その儀久しく廢れ、故を溫ぬるに師なし、暫く匙筯を用ひ、兼ねて鎭子(木製の皿の樣なもの)を用ふる所以なり」。と云つてある。平安朝以來の貴族、藤原一門に生れられた高祖道元禪師が、食事の時に手でご飯をまろめて食べたい、それが佛儀だからといはるる、そのお心持ちのほどを拜察すべきである。飯を口に運ぶと

云ふ微細のことまで、釋尊の行儀に倣はふと致さるる、そのお心持ちは如何であつたであらうか。八宗九宗にその人は多いけれども、高祖道元禪師の如く、釋尊を欽仰し尊重してゐられた方は恐らくないであらう。

更に　高祖道元禪師が、釋尊の言句にあらずんばいはず、釋尊の行跡にあらずんば踏まじといふ大覺悟を抱いてゐられた事を知るために「眼藏、八大人覺」の卷の末節を引かう。卽ち「如來の般涅槃よりさきに、さきだちて死せるとも がらは、この八大人覺をきかず、ならはず。いまわれら見聞したてまつり、習學したてまつる。宿殖善根のちからなり。いま習學して生々に增長し、かならず無上菩提にいたり、衆生のためにこれをとかんこと、釋迦牟尼佛にひとしくして、ことなることとなからん」。と仰せられてゐる。何んといふ欽慕のしかたであらう。高祖道元禪師は釋尊が入滅の時に說かれた八大人覺を領覽することの出來たのを悅ばれると共に、自らも八大人覺を最後の敎化として入滅せらるるその有樣、「釋迦牟尼佛とひとしくして、ことなることとなからん」と仰せらるるその言葉、實に高祖道元禪師の眼には釋尊の外、何物もなかつたのである。

これは獨り高祖道元禪師のみでない、太祖瑩山禪師も釋尊を欽仰致さるるの餘り正中二年八月十五日入滅の時に、同じく八大人覺を示されたと云つてある。

その他、あげ來れば際限が無い。高祖道元禪師が「眼藏」の中には釋尊を呼ぶに、慈父、大敎主、大導師、の名を以つて致してゐられるが如き、太祖瑩山禪師が「傳光錄」等で釋尊を本師と仰ぎ、玄牝になぞらへてゐらるが如き、兩祖禪師ともに釋尊を如何に讃仰してゐられるか、最尊最勝の宗主としてゐられたか、大理想の顯現としてゐられたか、大導師、本尊としてゐられたか擧げ盡くすに術が無いほどである。

七　三歸と本尊

尙ほ詳細に渡つて講ぜねばならぬこともあるが、大體、上に述べた所で、我が曹洞宗の本尊が、釋尊であることを明瞭にすることが出來たと思ふ。本尊が釋尊であることを的確と話すがために、多くの人が邪解し易い三歸のことを說き、妙法のことを說き、高祖太祖兩禪師が示誨や行蹟をも擧げた。

これ以上縷々云ふには及ばぬだらうが、人の惑ひ易い三婦と本尊に就て今一應繰り返へして云ひたいのは歸依三寶の根本精神は、翻邪歸正といふことにあるのである。既に翻邪歸正して、佛門の人となつた人はその本尊によつて行道しなければならぬ。その本尊は各宗によつて一樣でない。而して我が曹洞宗の本尊は釋尊であるといふことである。

佛在世の時に迦葉尊者等の佛弟子が致されたが如く、その法燈を相續致された列祖がなされたが如く、至心に三寶に歸依して、佛門に入り、釋迦牟尼世尊を慈父、大敎主、大導師と仰ぎ、本尊と仰ぎ以つて、釋尊の如くに發心し、釋尊の如くに修行し、釋尊の如くに菩提を得、釋尊の如くに涅槃を得て、自利利他の二行を圓滿する、これが宗門の規矩であり、宗門の宗格である。

兩祖禪師と信仰

今月は、我が曹洞宗の高祖道元禪師と太祖瑩山禪師の御祥諱の月であるから、兩祖を追慕し恭敬する意味を以つて、兩祖の略歴と、御信仰の狀態を法話し以つてお互の信仰を培養し、兩祖の信仰に一如する好因緣を結びたいと思ふ。納は我が國、いや世界中の人達が悉く、兩祖の信仰に一如して欲しいのであるが、それは一寸六ケ敷いにしても、曹洞宗の僧侶や信者の人達だけは、是非とも兩祖に一如した信仰を持つてほしいのである。

先づ高祖道元禪師の略歴より説明を初めやう。

高祖道元禪師

我が高祖道元禪師は、人皇六十二代、村上天皇の御裔、久我内大臣源通親公の御子にして、土御門天皇、正治二年庚申一月二十六日を以つて御誕生あらせられた方である。

建保元年四月九日、御齡十四歲にて出家あそばされ、貞應二年二月、御齡二十四歲の春、入宋修學。寶慶元年五月一日、御齡二十六歲の夏、天童山に登り、如淨禪師に御隨身遊ばされ、これより徹底的の御修行があつて信仰生活に沒入致された。これより更に向上進展して悟界を驀過し、佛邊をも透過し、終に釋迦牟尼佛五十一代の祖師とならせられた。

安貞元年の秋、御齡二十八歲、御歸朝遊ばされたが、安貞元年より、寛元元年に至る十七年間は京洛の地に在らせられて、廣く有緣の道俗を御教化あそばされ、法雨大に潤ひ、天下の歸依、禪師の御所に集つた。就中禪師の信者、波多野雲州大守藤原義重は、禪師を信ずること特に深かつたから、その領地なる越前國志比の里に、一大梵刹を創設して禪師を御請待し、傘松峰大佛寺と稱し

た（後に吉祥山永平寺と改稱す）。この大佛寺は高祖禪師の御意に大に愜ひ禪師はこれよりこの寺を下られて他山に住持せられるといふことが無かつた。卽ちこの大佛寺が北越に於ける布教の根本道場、曹洞宗の大本山、佛乘法流の本源地と定まつたのである。斯くしてこの水脈は四方に横溢し、日本全土をして陸沈せしむるまでに至つたのである。禪師の會下には、孤雲懷奘禪師を上足として徹通禪師、寒巖禪師、寂圓禪師、此の外幾多の龍象衆在りて、禪師の宗風は尤も隆盛を極め、將來展開の基礎は全く玆に成立致したのであつた。禪師の行持は、今改めて說明するまでもなく、純潔なる操行、溫厚なる慈愛、禪師の著書正法眼藏中に披瀝されてゐる。今それを委しく說いてはゐられぬから、禪師の御詠によつて、それを髣髴せしめやうと思ふが、その中に

立ち寄りて影もうつさじ溪川の、流れて世にし、いでぬと思へば。

草の庵にねてもさめても思ふこと、我よりさきに人を渡さむ。

といふ二首がある。これは衲が自己修養の眼目とするばかりでなく、他の多くの人々とともに是非とも信受奉行したいと思ふところである。一面より見れば純潔霜の如き行持があり、他面には溫厚春のそれに似たる慈愛と德光が輝いてゐる。誠に活ける佛世尊の感じがする。當時の月卿雲客諸有階級の人々が都て禪師に歸依したといふが、誠に然もあるべきことと思ふ。

禪師は建長五年七月、永平寺を孤雲懷奘禪師にお讓りになつた。

是より先き禪師は、四大の調和を失はれ、病勢が日に募るばかりであつたから、もう化緣の終りも來たと思召されてか、その年の正月六日、最後の御說法の御心で、佛遺敎經の中の八大人覺を敎誨になつた。座下に群集つた道俗は、何れも皆感泣し、悶絕倒地したものさへあつたと傳へてある。此の時の說法は、說く禪師にも特別の心添へがあつたであらうし、又聽者も一際注意を拂つて拜聽したことであらう、もう二度とは拜聽の出來ない說法と思へば身も心も忘失

するに到るは當然のことである。その時の説法の八大人覺と云ふのは

一者少欲。これは未だ得ざる五欲の中に於て、廣く追求せざることを云ふのである。五欲とは、色欲、聲欲、香欲、味欲、觸欲、或は、財、色、食、名、睡の五をいふのである。

吾人が得んと欲して焦心苦慮しつゝある物質欲、名擧欲等のことで、人の一生の十が七までは此等の欲望の爲めに汲々として居る。特に利己主義の旺盛な現代には、相互に五欲を得るのが人生の目的のやうにも心得て居る輩が多數にあるやうである。此の五欲等に汲々してゐると、その人は人非人になつて、義理も人情も忘れてしまう。その實例はあぐるまでもなく、個人的にも、社會的にも、國家的にも、幾許も露れて居る。最近の新聞の傳ふる處によれば、我同盟國たる英國が彼の羊頭を掛て、狗肉を賣る底の米國と××國の背後に立つて、盛に排日を煽動し、日本の不利を謀つてゐるといふ。欲の前には義理も人情も無い世の中である。彼の明惠大上人は北條泰時に國を經綸するの秘訣はと問はれて無欲といはれた。無欲の大精神であると教訓されたのであるが、成るほど無欲でなければ行かない。米國の正義も、人道も、英國の自由も、平等も、名は誠に美であるが、その根本に欲が根ざしてゐるのでは仕方がない。國際聯盟も欲、媾和會議も欲、五欲の爲に藥が變じて毒となつてゐるのであるから油斷がならぬ。欲の恐るべきこと毒蛇惡獸よりもより以上であると我が佛陀が教へ置かれてあるが全くその通りである。明惠上人のこの教訓は獨り北條泰時への教訓ではない、現代の爲政家を初め各自への一大教訓である。

然し衲は欲を無視し、又は欲は價値の無いものだと云ふのではない。社會の一員として人生に活きて居る以上、欲は相當に必要である。「衣食足て禮節を知る」と云ふ側より云へば、欲が無くては禮讓は行はれないとも云はれる、欲の必用なることは天下公明の事實である。が、然し其の欲を己れ一人にて獨占す

るといふことは甚だ不可。これは害あつて得無きことである。畢竟己のものまでも損失してしまふこととなるのである。であるから佛の教誨給ふ少欲、この少欲と云ふ意義は無理絶欲の意味では無い。少は多大の反對で、十の中、四又は六を得て、所謂欲の平均をせよと云ふ意味であるのである。衲は欲の平均を主張するが、欲を平均すれば、欲は決して惡ひ物では無い。平均の處は無欲ではないか、無欲であればこそ平均が可能であるのである。國と國、社會と社會、人と人、相互に欲の平均を肯定すれば相互の目的を達し、平均も正義も、求めなくとも自然に進展するのである。

一家庭の平和も、個人と個人の融和も、欲の平均より產出するものである。要するに人生の幸福は、天より降るものでも、人より附與されるものでもない、唯だ欲の平均を遂行する處より起るものと知るべきである。これが八大人覺の第一少欲の御教訓である。

二者知足。この知足、足ることを知ると云ふことは、何人も口にも談り筆にも記すことである。又足ることを知るの佳きことは、十二分以上に承知してゐるのであるが、イザ實行と云ふ場合になると、なか〳〵足ることが知れない。得たる上にも更に得たいのが人情でこの人情を抑制するのがなか〳〵困難である。然し知足者は進展すべく、不知足者は悲境に泣くのが當然であることを知らねばならぬ。獨逸も足ることを知つてゐたならば今日の狀態に苦しむことはなかつたであらう。米國は不知足者の一人であらうが不知足者は富むと雖も甚だ卑劣であると云ふことである。富豪と灰吹きは溜るほどきたなくなると云ふ。よし天國に生れても滿足はなからう。支那利權の半を獲得し、日本を高壓し、進んで英國權内に突入してもまだ〳〵足ることは知られまいが、最後には知足者のために憐笑されねばならぬことを記憶するがよい。古人も知足安分といつたが、この知足と安分とは、實行は甚だ困難である。困難であるけれども、眷

眷腹膺して終生に渉つて修養すべき一大事であると知らなければならぬ。

三者樂寂靜。
四者勤精進。
五者不妄念。
六者修禪定。
七者修智惠。
八者不戯論。

以上の八、これを八大人覺と云ふ。一一要旨だけでも説明すればよいが、また後日、八大人覺講話を致すから今日は略してをく。

この八件は、大人偉人の自覺する上の道で、人生最後の目的はこの修養方法に依て達せられるのである。然ればこそ釋迦牟尼佛も高祖道元禮師も共に最後の説法としてこの八大人覺を以つて最後の御訓諭に致されたのである。高祖道元禪師は八大人覺を説かれたその御言葉の中には、「これ八大人覺なり……、大師釋尊、最後之説、爲大乘之所教誨、二月十五日夜半の極唱、これよりのち、さらに説法しましまさず、つひに般涅槃しまします……。このゆゑに如來の弟子は、かならずこれを習學したてまつる。これを修習せず、しらざらんは、佛弟子にあらず……。しかるにいましらざるものはおほく、見聞せることあるものはすくなきは魔嬈によりてしらざるなり……。むかし正法像法のあひだは、佛弟子みなこれをしれり、修習し參學しき。いまは千比丘のなかに一兩箇の八大人覺しれるものなし、あはれむべし、澆季の陵夷、たとふるにものなし……。如來の般涅槃よりさきに、さきだちて死せるともがらは、この八大人覺をきかず、ならはず、いまわれら見聞したてまつり、習學したてまつる、宿殖善根のちからなり、いま習學して生生に增長し、かならず無上菩提にいたり、衆生のためにこれをとかんこと、釋迦牟尼佛にひとしくして、ことなることなからん」

と仰せられてゐる。

此の御聖語を熟讀して、高祖道元禪師の釋尊を信仰し給へる精神と、其の正法に憧憬あそばされる徹底的誠意に衲は感激し措くことが出來ぬ。「釋尊より前に死する御弟子は、この八大人覺をきかず、澆季の今日、日本國に生れたる我は、この正法をききもし、修學もする」と云ふこの御言葉と「いま習學して生生に增長し、衆生のためにこれをとくこと、釋迦牟尼佛の如くせん」といふ御誓願これは偏に釋尊を信ずる信念の甚深なる處より發することで、高祖道元禪師にして初めて、此の御言葉も、この御誓願もあるのである。衲か見聞の薄きがためであるかも知らぬが恐らくは古今の偉人中に於ても多くこの言葉、この誓願をした人はあるまいと思ふ。この信仰の存する處こそ佛祖現成の處なりと云はれるのである。機法一如とか、佛凡一體など云ふことは、唯理論の空言にて味はれるものでないと知り、我等も勤めて禪師の信仰に一如するやう修養したいものである。釋尊の本尊たることをも忘れ、其の信仰も思想も一切信受しないやうなことでは、肉にも靈にも力といふものが出ない。宗門の一大生命といふものが無いことになる。宗門はただ、日に月に凋落し住くの外はない。將來個人の向上と宗門の改造は唯だ這個の信仰と思想の修養に待つより外何物も無い。高祖道元禪師の信仰と思想、この一事を繼承すること、これが何よりも大切である。御祥諱の大供養も、眞實の報恩もこの外にはない。

建長五年九月、御齡五十四歲。禪師は御病增々重らせられ、篤信者の懇請を容れて京都へ御出錫になり、俗弟子道正庵覺念坊に御靜養になつたが、九月二十九日の朝靜かに室内を經行し、若於林中、若於僧坊　若白衣舍　若山曠野——の經語を四方の柱に書寫し給ひ、其の夜十二時、丑の刻に寂然として遷化あそばされたのである。

彼の若於林中等の聖語は、法華經神力品に在る御妙文で、此の經語の趣旨は、

林の中、曠野山谷の中は勿論のこと、寺院であれ、俗家であれ、何處でも此處でも都て佛弟子の道場、涅槃の處である、此去つて遠く西へ往き東へ往くのでない、此處が佛の道場、此處か涅槃の處であると云ふ甚深なる佛意、高祖道元禪師の自受用三昧の存する所であるのである。通俗にこれを説明して見れば、釋迦牟尼佛は跋提河邊の婆羅林の間にて涅槃に入り給ふたが、我も亦その御芳躅を慕ふて此俗家にて遷化をする、此の處が極樂淨土である、涅槃の淨土であると仰せられたのである。禪師は御一生の始中終、一ら釋尊の行持に一如なされたが、これが甚深なる信仰より出でたる行蹟と云ふものである。實行と信仰は形と影の關係、形直ければ影直く、影が曲つたのは形が曲つて居る、少しも違ふことの出來ぬものである。

依つて曹洞宗の僧侶も信者も釋尊と高祖道元禪師を信仰し、終晝至夜佛と共に居り、祖師と共に在りて、信仰生活に無上の法悦を得て、一生五十年は無論のこと生々世々永久の生命に入る樣に致したいものである。更に太祖瑩山禪師の略曆と信仰を説かねばならぬ。

太祖瑩山禪師

太祖瑩山禪師は嵯峨源氏の末裔、瓜生氏、越前國多禰邑の豪族である。人皇八十九代龜山天皇の御宇、文永五年十一月二十一日、御誕生あそばされた。

宿世の本願力に乘じて御誕生あそばされたこととて幼き時より三寶を敬禮し自から出塵の志あり、御兩親も其の志の堅固なるに感じて終に恩愛の情を割き出家することを許された、これは建治元年四月八日御齡八歳の時のことであつた。出家以後禪師は、曹洞宗大本山永平寺に入らせられ苦修練行を致された。

弘安八年、禪師御齡十八歳　三衣一鉢諸國行脚の途に上られ、先づ越前寶慶

寺寂圓禪師に參じ、京都に上りて萬壽寺寶覺禪師に、白雲寺惠曉禪師等に參じて道器を練り、更に比叡山に登りて一心三觀　天台の教意を究められた。

正應元年秋、越前に歸り再び寂圓禪師に參じ、尋で永平寺に歸り、徹通禪師に親參し、

正應二年、御齡二十二。徹通禪師に隨ひ錫を加賀國大乘寺に移られることとなつた。禪師、法華經を看護したまひ、法師功德品の中の「父母所生眼、悉見三千界」の文に至り大に省悟し、遂に方丈に登りて所解を呈せられた。徹通禪師之を許し給はず、禪師ます〳〵憤勵工夫、暫時も措かれるといふことが無かつた。

永仁二年十月二日、徹通禪師上堂、平常心是道の話を提示せらるを聞き、豁然大悟して曰く、「我れ會せり〳〵」徹通禪師曰く「汝會せりや」禪師曰く「黑漆崑崙夜裏走」。徹通禪師曰く「未在更道」禪師曰く「茶に逢ては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す」徹通禪師其の見所の徹底なることを證明し、且つ曰く、「爾向後洞上の宗風を起すべし」と激賞せられたといふ。

平常心是道と云ふ此の一句、これこそ洞上宗風の秘鍵であるが、この秘鍵を掌握することが實に一大工夫の存する處である。「黑漆崑崙夜裏走」と「喫茶喫飯」とは、非常な相違である。黑漆崑崙夜裏走では洞上の宗風の秘鍵が握れてゐるとはいはれない。徹通禪師が「未在」と云はれた所以は茲にある。「逢茶喫茶、逢飯喫飯」に至つて初めてその秘鍵が握られてゐる。その人こそ實に洞上の主宰者といふべきである。然して此の「平常心」と云ふことは世俗にいふ所の「道は邇に在り、人これを遠きに求む」と云ふ樣なことの意義とは大分の相違があることを知らねばならぬ。

一體、此平常心の一句は、如何なる事實を表象したものであるかと云ふことを明瞭に知らなければならぬ。平常心是道。逢茶喫茶　逢飯喫飯。これは讀ん

で字の如しであるでは甚だ大早計といはなければならぬ。平常心と云ふにも種々あることで、凡俗の平常心あり、君子の平常心あり、更に太郎の平常心あり、お竹の平常心あり、何んにも、かにも平常心がある。一體儒教主義のことは、眞言宗で批判すれば彼の十住心中の第二愚童持齋心の分際で、云はば佛教への前階である。古人が孔子老子の教義を、四諦法の中の道諦なりと批判したが、之れが妥當であるか否かは疑問である。太祖瑩山禪師の平常心は太祖瑩山禪師の平常心である。お互の平常心、太郎、お竹の平常心では無い。これを忘れてはならぬ。これを忘れては全く道の標準が立たなくなる。衲は太祖瑩山禪師の此の平常心、其御生涯に於て徹底なされたる、修行の順次を考へると、その修行の上に古人の所謂轉句、半提、全提の區別が明瞭になつてゐることを見ることが出來ると思ふ。而して禪師が全提の時節。之れが平常心である。此の平常心の禪師であればこそ、當時獨歩の大宗匠として、上御一人の敕問にも應答し、授戒の師位にも御立になつたのである。斯ふ衲は思ふ。が然し衲は暗中摸索して、滅多無性に說明すると云ふ意味ではないから、よく〳〵祖意の存する處を參究するがよい。此の平常心、之れは涅槃妙心と云ふことが出來る。また佛心と云ふことも出來る。また釋迦牟尼佛の無上道心といふことも出來る。禪師は此の心を以て二世峨山禪師を接し、峨山禪師は此心を傳へて、二十五哲を打出なされたのである。然れば本宗の活人劍は、この平常心である。であるから此の平常心是道は、或者の主張する愚童持齋心的平常心などとは雲泥の差違がある。禪師の全生涯は一貫して此の平常心の露現であつたのであることを知らなければならぬ。兎角語を以て語を解すると誤解に陷り易いものである。凡そ語を解するには其人を以て其の語を解するでなければ不可ぬ。これは衲の見た平常心の一句である。或者は又其の見解から批評するであらう、然し批評の批評は太祖瑩山禪師に一任するより外、手段は無きものとして措くより致方はない。

太祖瑩山禪師の自證の明白なることは、高祖道元禪師の自證と一如にして、的確に釋尊の自證に投入なされたることは懺毫も疑處はない、隨つて釋尊を欽慕あそばすことも極めて甚深であつた。

この信仰と思想が曹洞宗の生命で、この生命の在る間は、禪師の所謂「ただ諸人の精進と不精進とによりて、諸佛頭出頭沒せるのみなり、今日も頻りに辨道し、子細に通徹せば、釋尊直に出世なり、たゞ汝等自己不明によりて、釋尊昔日入滅す。汝等既に佛子たり何ぞ佛を殺すべけんや」。釋尊の生滅は學人の辨道と不辨道とに依るとの御諭しは、釋尊信仰の徹底を表明なされたものと納は拜察する。

然れば曹洞宗に因緣のつながるものは僧侶と信者の區別なく、禪師の信仰を信仰し、禪師の思想を思想する道心こそ肝腎である。これが大師御祥諱の眞實供養といふものである。

永仁三年秋、阿波國海部某の請に應しての城滿寺建立を初めとし、大乘寺、淨住寺、永光寺、總持寺に錫を移され化儀尤も盛であつたが、化緣の遠からずして盡くべきを知りなされてか、

元享四年七月、總持寺を峨山禪師に讓り給ひ、翌年の八月八日、先づ八大人覺を提示致された。この化儀は高祖道元禪師の行蹟を襲踏あそばしたもので、卽ち釋尊最後の說法と同一轍である。この八大人覺とは高祖道元禪師の御傳記の下に說明した通りで更に別の法であるのではない。八月十五日（太陽曆に推算して九月二十九日）の夜半、大衆を集めて、

念起是病、不續是藥、一切善惡、都莫思量、纔涉思量、白雲萬里と示された。此の御示は禪師慈悲甚深の血涙である。念起是病、不續是藥、この妙藥こそ法華經に說く、是好良藥、今留在此といふもので、この良藥を今日に御留めくだされた其の御精神こそ、釋尊の精神其儘である。言換へれば、これが卽

ち前の平常心であるのである。此の良藥を服せざる時は、地に倒れて悶絶する外はない。之れに依つて之れを見れば、禪師は初め平常心によつて大悟し、後に又平常心を遺して遷化あらせられたと拜察しなければならぬ。初後一貫、全く異議なく、誠に讃仰するにその辭がない。

正中二年九月二十九日、御齡五十八歳、禪師は溘然として遷化致された。

要　括

兩祖禪師の御履歷と信仰とを述べたから更にこれより兩祖禪師の行蹟を粗より細について話したいのであるがそれは後日にし、上いふ所を要括するに

「此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因緣あり、願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや」の御聖語に漏れない。此語は修證義第二十六節に在る。此の語の意義は、凡そ菩薩といふ菩薩は、宿世の本願力に乘じて、この南閻浮卽ち吾人生息する地球上に人身を稟け、衆生を救濟し給へることは皆釋尊の化儀に御倣ひあそばしたもので、特に此の南閻浮に局りて、出家、得道、見佛、見法と云ふ最勝の因緣がある、この最勝の因緣は此の國に局るといふことである、兩祖も諸々の菩薩と共に願力に乘じて此の國に生じたまふたのである、「汝等一切衆生も志を南閻浮の人身に發し見佛問法得道救生をするやう」にと云ふことであるのである。

この意味より考へると、兩祖禪師の始中終一代の化儀は、そつくり釋迦牟尼佛の信仰と思想と、その行蹟とであるといふ歸結を得るのである。依て兩祖禪師は本尊釋迦牟尼佛を信仰し、本尊の思想を思想とあそばされたることは懺毫の疑を挿む餘地はない。然れば兩祖禪師御祥諱の供養、香華讀經禮拜は勿論のこと、この信仰と思想を以て、邇く我日本國民より遠く西洋各國に宣傳し、今日の混濁を一洗するのが御供養の第一義と思ひ、兩祖禪師の略傳と信仰を說述

した次第である。各自皆正法の爲に奮鬪努力したいものである。

更に一言云ふて置きたいが、宗門振興の策として千言萬語、縷へ説明しても、樞要は信仰と思想に歸結する。信仰と思想さへ振興すれば、教育の振興も、布教傳道の振興も、社會的活動も、諸般の事業一切一時に振興するものである、若し之れ無くしては何事を畫策しても、石火、電影裡に終熄するものと思ふ、信仰と思想なき教育、信仰と思想無き布教傳道、それが怎麼いふ功結を呈しつつあるか、各各活眼を開きて見れば直ぐ判ることである。諸見池塘芳草夢、階前梧葉已秋聲。うつかりしてはゐられない。もう秋も中になりかけて來てゐる。

成道の釋迦牟尼佛

一　成道の奉祝

釋迦牟尼佛を尊重し恭敬するといふのに、何つの日でなければならぬといふことは無いが、特別の日には特別の日の心持ちになつて、尊重し恭敬すべきである。親の追善を致すには、親の命日にするがよく、親の誕生を祝すには、親の誕生日にするがよく、親の成功を祝するには、親の成功をされた日にするがよい、その日に追善し、その日にお祝ひすれば、何んとなく心持ちが、そこに行つて、しつくりした氣持ちになれてよいものである。釋迦牟尼佛を尊重し恭敬するにも、毎日毎夜、致してゐればよいのではあるが、やはり、釋迦牟尼佛が、佛と成られたことを喜んで、尊重恭敬するには、その佛と成られた日、卽

ち成道の日に致すが最も適當してゐる。釋迦牟尼佛が、誕生遊ばされたことをお祝ひするには、そのお誕生日にするのが、適當である。また釋迦牟尼佛が、涅槃なされたことを悼むには、その涅槃の日に致すのが、適當である。かるが故に、古來、釋迦牟尼佛の誕生を喜ぶには、誕生會卽ち降佛會といふ法會を營む日が定まつて、それが四月八日といふことになつてをり、釋迦牟尼佛の涅槃を追善するには、涅槃會の日といふものが定められて、二月の十五日といふことになつてゐる。それからまた、釋迦牟尼佛の成道の日をお祝ひするのには、成道の日、卽ち十二月八日と定つてゐる。

釋迦牟尼佛、御一生、八十年の間の御行跡、何づれを粗忽にし、追慕しなくてよいといふのは無いけれども、その誕生、成道、涅槃の三は、特に吾々兒孫の身に泌みることであるが故に、この三を記念し、これを三佛忌と稱して、それ〴〵の法會を嚴修むことになつてゐるのである。

最もこの三佛忌を他宗では、それほどに大切に營んでゐないやうであるが、我が宗門では何よりもこの日を大切にしてゐる。これは是非かうなくてはならぬことで、他宗に於いても、この三佛忌だけは大に嚴修むやうにして貰ひたいものである。一體、我が日本佛教は祖師中心の佛教とも云ふべき有樣で、各宗は各〴〵自分の宗派の祖師の誕生日、涅槃日は大切に記念してゐる、その法會も嚴修する、が然し釋迦牟尼佛の誕生日、成道日、涅槃日となると、到つて冷淡である。近來、お誕生の日だけは、花祭りといつて、盛んなお祭りをしだしたのは諒に結構である、然し成道の日に至つては、お祭日や年中行事の一にすらは愚か、この日のあることすら全く知らずにゐるといふ有樣である。これは實にあさましいことである。自分らの宗派の祖師のことだけを記念し、お祭りをして、釋迦牟尼佛のことを忘れてゐるといふことは、諒に勿體ないことである。今後の佛教は、釋迦牟尼佛を中心とし、釋迦牟尼佛の三大聖日（三佛忌）をおろ

そかにする様なことをしないで、この日には、一切の事業を休息し、尊重恭敬の念を以つて、釋迦牟尼佛に奉仕し、嚴肅な儀式を行ふて、お互にその法孫たることを喜び、この日を記念すべきである。

この十二月は釋迦牟尼佛成道の月で、その日は去る八日であつたが、今年もやはり、他宗他派ではこの成道會のお祭が無かつたであらうが殘念なことである。我が宗門では幸に宗祖道元禪師の時より、盛にこの日を記念し、最も嚴肅な佛事が行はれることに定つてゐるから、一萬四千の各寺院では、その法會が營まれたに相違ない。大本山では靜坐接心といつて、十二月の一日から一週間は、晝夜の別なく、僧堂で一山の清衆が坐禪をし、放身捨命、佛恩報謝、恭敬尊重、の心を專一にしたのである、末寺末派の寺院に於いても、この一七日の靜坐接心をした所は澤山にある。この七日七夜の坐禪をし、八日にはまた成道奉祝の法會を營むのであるが、これは至極よい清規であると、衲はありがたく思つてゐる。

我が宗門では釋迦牟尼佛の三大聖日、その何の日をも大切にするが、就中この成道日を大切にしてゐる。これは諒に道理のあることと思ふ。といふのは、釋迦牟尼佛の成道には甚深微妙の意義が特にあるからである。これをこれから講じて行かふと思ふのであるが經典に「本門の成道」「迹門の成道」といふことがあるから、順序として先づその「本門の成道」といふことを述べやう。

二　本門の成道

本門、迹門といふことは、法華經から出た思想である。これを精しく說いてをれば限りのないことであるから、ここにはその大體だけを述べることにとどめなければならぬ。法華經の如來壽量品に釋迦牟尼佛が諸の大衆に告げて言ふに曰く、汝等は「我は迦毘羅の城を出て、摩訶陀で成道したのである」といふ

やうに謂ふてゐるけれども實は然うでない。我が成道したのは無量無邊百千萬億那由陀劫の昔のことである。無量無邊百千萬億那由陀劫といふ長い年月は分るまいが、譬へていつて見れば、五百千万億那由陀阿僧祇といふ三千大千世界を、秣微塵にすりつぶし、その微塵を以つて、東方へ東方へと旅行し、五百千万億那由陀阿僧祇といふ澤山の數の國を過ぎて、其數採りに一微塵を落し、それからまた東へ東へと旅行をつづけて五百千万億那由陀阿僧祇の數の國を過ぎて、その數採りに一微塵を落し、更にまた東方へ東方へと旅行する、かくして五百千万億那由陀阿僧祇の數の三千大千世界を微塵にして以つてゐた所の微塵を悉く數採りにし盡して數へた澤山の國々、それからまだ數の中へ加へられないで、殘つてゐる國々、それらをも悉くひとまはりしてしまふまでの間を一劫といふのであるが、我れは成道して以來、今いふ劫を經來ること百千萬億那由陀阿僧祇の數である、一劫といふ年月でも想像も及ばぬほどであるのに、その劫を百千萬億那由陀阿僧祇といふ數だけ經來つてゐるのである。その長い長い年月の間、我れは常にこの世界にあつて、說法し教化してゐた、まだそればかりではない、我れはこの世界の外にある百千萬億那由陀阿僧祇といふ澤山の國々にゐて、一樣に衆生を教化し說法してゐたのである。また我れ、今日まで汝等に、我れは種々の佛となり、また涅槃に入つたといふことを說いたのは、皆方便であつた。また「我れ少くして出家し、無上正偏覺を得た」といふやうに說いたのも、それは方便であつたのである。眞實をいへば、我れは成佛して已來、長い長い年月を經てゐることは、上に說く所の如くである」。と示してある。これが正しく本門の成道を釋迦牟尼佛が自ら說き示されたものである。

實に釋迦牟尼佛は、五百塵點劫の大昔に、本門の成道を致されてゐるのである。經文に「惠光照無量、壽命無數劫、久修業所得」、といつてあるが、いかにも釋迦牟尼佛の大智慧光明、無量無邊にして、何處の果の果までも照らさるる

こと大日輪のごとくであり、その壽命の長いことは數へ様にも數へ様がない。その大智慧光明、その大無量壽はどうして得られたかといふにそれは久しい間の修行の力によつて得られたのである、卽ち長い間の修行精進の功德によつて、釋迦牟尼佛は大智慧光明と大無量壽とを得られたのである、本當に成道せられたのである、成佛せられたのである。菩薩本行經には「諸惡ながく盡き、諸善のあまねくあつまり、また衆の垢なく、諸慾すべて滅し、前に知ること窮りなく、後に觀ること極りなく、現在に知らざる所なく、三達、はるかに鑒む、斯くの如き德あり、故に佛と號す」といつてあるが、釋迦牟尼佛は長い間の修行によつて、五百塵點劫の昔に、今云ふ佛となられたのである。これが卽ち本門の釋迦牟尼佛の成佛である、成道である。

本門の成道といふのは大體上にいふ所のことであると思へば、よいのである。

三　迹門の成道

迹門の成道は、本門の成道の後にある妙用である。經文にもこれを「果後の妙用」と說いてある。譬を以つていへば、本門の成道は天上の月のごとく、迹門の成道は地上の月影のごときものである。一月、天にあり影萬水に現す、この影が迹門の成道で、この成道が正しく、今日お互が奉祝する所の成道である。

この成道の佛、これが所謂、歷史上の釋迦牟尼佛で學者達が研究してゐる釋迦牟尼佛である。經典にはこの釋迦牟尼佛を應化身佛といひ、應佛といひ、化佛といつてある。

迹門成道の佛、天上の月の地上の影、應化佛、化佛といふやうにいへば、この佛、卽ち釋迦牟尼佛は、本門成道の佛に比べて貴くないやうに思ふ人がある

かも知れぬが、それは大なる誤である。本業瓔珞經の中には「二法身あり、一には果極法身、二には應化法身なり。應化法身は影の形に隨ふが如し、果身常なるを以つてこの故に、應身もまた常なり」といつてあるが、この果極法身とは卽ち報身のこと、本門成道の釋迦牟尼佛のことである。この應化法身とは應化身卽ち迹門成道の釋迦牟尼佛のことである。この本業瓔珞經の文で明かである通り「果身常なるを以つての故に應身もまた常なり」で、本門成道の釋迦牟尼佛も常住、迹門成道の釋迦牟尼佛も常住、迹門の釋迦牟尼佛は本門の釋迦牟尼佛に卽して共に常住法身であるのだから、その間に優劣上下は無い。高祖道元禪師もこの消息を說いて「降生より三十歲、十二月八日に成道すといへども、七佛以前の成道なり、諸佛齊肩同時の成道なり、一切諸佛より末上の成道なり」と示されてゐる。迹門の成道、迹門成道の佛が、本門の成道、本門成道の佛に上下優劣などのあるものでないことを、ここで徹底諒解すべきである。

一體、本門の成道のことを說くのは、迹門の成道の來由を明確にするがためであり、迹門の成道のことを說くのは、本門の成道の妙用活動を示すがためである。「本迹異りと雖も不思議一なり」といふのはこの邊の消息をいふたのであると見ることが出來る。

衲は上いふごとくに、本門の成道、迹門の成道を共に參究する事によつて、愈〳〵釋迦牟尼佛の貴きこと、大慈大悲の甚重こと、大智慧光明の廣大こと、大禪定力の堅固なることを一入ありがたく感じて、ありがた涙を流すばかりである。

若しも、本門の成道、本門成道の釋迦牟尼佛ばかりで、迹門の成道、迹門成道の釋迦牟尼佛があらせなかつたならば、吾等は苦集滅道の四諦、十二因緣の敎法、正見正思惟等の八正道といふことを認得ことが出來ず、いつまでも、生死の羈絆につながれて、涅槃の大安樂境に到ることが出來ないで、苦海に溺沒してゐなければならなかつたであらう。思ふてここに到ると實に釋迦牟尼佛の

救濟し給ふ御手がありがたくてならない。吾等はこの救ひの御手によつて、大安樂の梁棧の境に遊び、限りなき生命と、限りなき光明とを得るのである。

昔から釋迦牟尼佛の成道せられたことを說いて、「一見明星、開發悟道、有情非情、同時成道、草木國土、悉皆成佛」といひ、または「今や覺者の域に上れる太子は觀喜の情に堪へず、一聲高く獅子吼して曰く「生死無量なり、住來端緒なし、屋舍を求むるものは數々胞胎を受けん。この屋を觀たるを以つて、更に屋を造らず、梁棧已に壞れ、臺閣摧折しぬ、心已に行を離れて、中間已に滅す」とこれ成道の偈なり」と云つてゐるが、これらは諒に、ありのままを親切に着實に傳へたものである。成道は恁麼ゆかなければいかぬ。自利もなく利他も無い。「梁棧已に壞れ、臺閣摧折しぬ、心已に行を離れ、中間已に滅す」とは何んたる好境界であらうか。諒にこの境を得ては觀喜に堪へられなかつたに相違ない。この好境に到達つた所が、迹門の成道であると共に、また本門の成道である。絕言絕慮、不可思議の境界である。大聖釋迦牟尼佛は此成道を遊ばされてゐる、我等法孫も亦この成道が得られないのでは無い。精進辨道、怠る所がなければこそこれの得られるのである。我等佛教徒が目的はこの釋迦牟尼佛と同じ成道を得ることの外には無いのである。

四　佛教徒の目的

佛教徒の目的は、彼の耶蘇教徒のそれの如きものでは無い。耶蘇教從は神の前に頭を叩げて、天國を望みそこに生れんことを希ふのであるが、佛教徒の目的はそんな生天にあるに非ずして、成道にあるのである。儀禮によつて生天せんとするに非ずして、攝心し成道することにあるのである。生天は儀禮によつて達せられるかも知れぬが、成道は儀禮では出來ぬ。攝心する所に成道がある

攝心の反對は放逸であるが、心身を放逸にしてゐては何事も能きない。原始佛教では、數息觀といつて、出入の氣息を數へて、心を攝め、不淨觀といつて、身の不淨なることを觀じて、愛著の心を捨てて、心身を攝め、十二因緣といつて、吾等が迷界に顚倒してゐる根本を觀じて、その無明の根本を破るといふ風にして攝心をしたものである。それが漸次に開展して、後世の佛教となると、念佛によつて心を攝め、呪文を唱へて、心を攝め、只管打坐といつて、專一に坐禪辨道し參禪工夫といつて、古則公案といふものを拈じて心を攝める、といふことになつた。然うした有樣で、心を攝める形式といふものは千差萬別となつたが、然しその心を攝める眼目はといへば、成道にあるのである。桶底を脫することにあるのである。桶底を脫するとは成道の樣子をよく形容してゐる語である。攝心を致すと、桶の底がゴポッと拔けたやうに、苦痛のどん底から脫することが出來るのである。この桶底を脫した所は、所謂「梁棧已に壞れ、臺閣摧折し了つた」境界である。ここには捨つべき煩惱もなければ、求むべき眞如の月もない。伊豆の大島へ行くと賤が女が桶に水を吸み込んで、頭の上へのせて運ぶといふが、それが月夜などであると、その桶の水に淸い月が影を宿して綺麗な光景であらうが、その桶の底が拔けては眞如の月も宿りはすまい。その所が實によいのである。梁も棧も壞れてしまい、臺も殿も落ちてしまつて、宿るべき家もなく、桶の底はぬけてしまつて月が入るべき所もないといふ所、この所を成道とも成佛ともいふのである。この境界を「一見明星、開發悟道」の時とも古人はいつたのである。この境界に到達ること、これが佛教徒の目的であるのである。生天などはしても、何の益にもたつたものではない、佛教中の人は他力宗であらうと、自力宗であらうと、この好境界に到達ることが、その目的である。この地に切めて呵呵大笑することが出來るのだ。

佛教徒の目的がここにあることを觀じて、今日の佛教徒の實狀を見ると、諒

に寒心せざるを得ない。口にこそ佛教の教理を説くことを知つてゐるが、身心を攝めて、眞箇の佛教を體得することを知らない。身心に佛法を獲得し、體驗してゐるのでないから、その佛法が力となつてゐない。お互に深く愼しまなければならぬことである。お互が眞箇に佛法を體驗する、卽ち自覺するといふことがあれば、自ら覺他、卽ち他をして覺らしめるといふ力も現はれ、所謂、自覺、覺他、覺行圓滿といふ佛教徒の本分を全ふすることも能きるのである。この消息は言說專門の佛教徒では夢にも見ることは能きない所である。

衲はここに改めて、我が宗並に他の宗の僧侶諸君に望む「諸君が宗弊の革正だの、家族論だの、教育改正だのといふ千端萬端の小言は一切枝末の言議、枝末に沒頭り、枝末の改造を論ぜんよりは各自各各その身心を拋却て、桶底を脫するといふ、根本の改造、眞箇の改造を第一番になされんことを。この改造なくして、如何して佛教の生命が現はれやう。佛教徒と稱しながら世の哲學者と異る所がないやうでは、なんの面目があらう、放身捨命、大死一番。此所に大活がある。大活つて初めて、「釋迦何人ぞ、我何人ぞ、大丈夫如來の行處に向つて行かず」といふ大力量人となることが能るのである。一切の改造は、期せずしてここに成るのである。眞箇の佛恩報謝、徹底的の衆生濟度、一切の活動、一切の行事は、この時より、初めて徹底的にすることが能るのである。

五　成道後の活動

活動といへば、直に行基菩薩や、弘法大師を聯想する。行基菩薩や、弘法大師が、社會の公益を圖られたことは、諒に結構なことである。が然し、活動の仕方といふものは、時代と共に推移し、時代の要求とよく合つたものでなくてはならぬ。人の活動の跡を追ひそれの眞似をしてゐるのでは、眞箇の活動といふことは能ぬ。

さてその眞箇の活動は、どうすれば能るかといふにそれは既に述べた通り、大死一番、桶底を脱して後でなければ能ぬことである。然し桶底を脱するといふことは、今萬人に望むことは難しい、乃で納が希望を云へば、先づ佛法僧の三寶を恭敬し、次に因果の道理を信じて欲しい。三寶を恭敬し、因果を信じて疑はぬ人であれば、その人の行儀は自然に如法となり、朝夕の勤行が自然に人を化することとなる。世の人々を惑はす所の利欲の念も自然に薄らぎ、名譽を欲する野心に追ひまはされるといふやうなことも無くなつて、自他共に各々の本來具有の妙德の光に照され、過ちを改め善に遷るやうになる、自己の改造、社會の改造は、斯くして自ら能るのである。

然るに今日、佛教を信じない人は兎も角も、一廉の佛教信者であるといふ人が、三寶を恭敬することも知らず、因果の道理をも信じないで、改造などを口にしてゐるのは、本末轉倒のことである。今日の佛教信者の中には、自分の宗名さへ知らずにゐる人があるが自分の宗旨の名や、その教義の大體ぐらゐは了解て貰いたいものである。我が曹洞宗の信者で、その教義を知らずにゐる人もあるが、我が宗の教義は、釋迦牟尼佛を本尊と仰ぎ、釋迦牟尼佛を恭敬し、「朝々佛を抱いて起き、夜々佛を抱いて眠る」といふ工合に釋迦牟尼佛と共に起き、共に居り、共に行き、共に眠るといふのであるといふくらゐのことは心得てゐて貰いたいものである。修證義は我等の鏡、曹洞宗の鏡である。この鏡に照して、お互の信念の正邪を辨へ、身心の邪曲を改むるやうに致せば、我が宗門の教義に背かないといふことが出來る。

正法の功德は諒に微妙なものであるから、何人であらうとも三寶を恭敬し、因果を信じ、修證義の鏡に照らして、自己を正しうして居さへすれば、その人々の心は隱かに、その家庭は平和に、如何なる大艱難に逢着うともよく、それに處して、七顚八倒を免れることが能るのである。

この正法を我等僧侶は護持してゐる。この正法を人に弘通することこれが、吾等の何よりも先きにすべき最も大切な、最も手近な吾等の活動である、この活動より更に進んでは、社會萬般の事業に手を出して大に活動するがよい、幼稚園を立て、日曜學校を開き、女學校を設け、貧民救濟所を建つ、何づれも皆大切なことである。然し物には順序がある。事は先づ自己の脚下よりし、近きより實踐して行く樣にしなければ、驚天動地の大活動をなすことも能ぬのであるから、よくこの邊の消息を注意しなければならぬ。

六　佛教徒の祝日

五百塵點の昔に成道致された釋迦牟尼佛が、近く三千年の昔に更に成道の相を示し下された。それによつてお互は、佛を信じ、法を信じ、僧を信じ、三世因果を信じ、桶底を脫する底の禪的大修行をなし近きより遠きに向つて、大活動をなすべきことをも、徹底了得ることが能きたのである。思ふて茲に到ると、釋迦牟尼佛の大恩、釋迦牟尼佛成道のありがたいことが、今更にひし〳〵と感じられて、歡喜に堪へぬ。

世には佛教徒といひながらこの大恩を知らず、この感激を得ないでゐる人がないともいはれない。甚しきに到つては成道の日、十二月八日を知らずにゐる人さへあるやうであるが、それでは佛教徒たる光榮を知らす、佛教徒たるもの の目的、佛教徒たるものの勤めをも知らずにゐるものといはなければならぬ。

十二月八日、釋迦牟尼佛成道の日、この日は吾等の全力を傾け盡して、大に祝ふべきである。彼の耶蘇教徒はクリスマスの祝日を忘れることはない、盛んに祝ふてゐる。その眞似をして佛教にも祝日を多く作らうといふのではないが、釋牟迦尼佛の成道の日は是非お祝ひしたい、盛大に、嚴肅に、お祝ひしたいものである。

この成道日のお祝ひは、今ここに衲が事新しく主張するのではない、この祝ひを盛んにするのが我が宗門の掟である。高祖道元禪師の永平廣錄に「日本國先代曾傳佛生會、佛涅槃會、然而未曾傳行佛成道會」永平始傳。已二十年矣。自今以後。盡未來際。傳而行矣。中暑。大衆要委悉這箇道理麼。良久曰。十方世界蒙光明。一切衆生聞佛說。拄杖袈裟共笑忻。僧堂佛殿鉢盂悅」といふ聖訓がある。卽ち「日本には、釋迦牟尼佛の降誕會と涅槃會とは以前からあつたが成道會はなかつた。衲が初めて成道會を行ふやうにしたのであるが、もうそれ以來二十年になる。これより後、永久にこの成道會を執行ふやうにしなければならぬ。この法會を行ふ所以は、釋迦牟尼佛成道の庇護で、十萬世界の草木國土は光明を得、一切衆生は佛慈を被つてゐるからである。見よ、老僧が持つ拄杖も欣び、袈裟も喜び、僧堂佛殿、皆歡んでゐるではないか」と示されたのである。

高祖道元禪師の兒孫たるものはよくこの聖訓の旨を奉じこれより益々成道會を盛に嚴肅に奉祝するやうに致すべきである。

涅槃の釋迦牟尼佛

一　大救世主釋尊

今日のやうに世が騒がしうては、この先き先きが怎うなることかと案じられるが、然し世の物騒は今日に初まつたことでない。我が教主釋尊の御代にも世は亂れて居つた。その時の印度には澤山の國々があつたがその國と國とは互に鰆隙を狙ひ合つてゐた。國内は國内で政治がうまく行かぬ。上流階級のものは中流のものを、中流のものは下流のものを、次から次と壓迫する、實に住み心地の惡ひ國情であつた。毎日毎夜、落ちつかぬ氣持ちに脅えてゐた。その時誰いふとなく、各國を一統する大帝國王が出現して諸の人々を一等に安らけく治める日が近づいた――轉輪聖王が出世する日が近づいた――と云ふことが云ひ

ふらされた。その時に釋尊は伽毘羅城の淨飯王の王子として生れられたのであつた。見るから聰明な王子を得た淨飯王は云ふまでもない、その王子を仰ぐことの出來た伽毘羅城の人民の喜びは一通りでなかつた。王子は文武に通達された、王妃も迎へられた。やがては城主となつて、内外を號令されるのであつた。この王子を得た伽毘羅城の人々は喜んだ。然し王子の眼には、伽毘羅城は無かつた、人民が塗炭の苦しみ、救を求むる悲鳴、此ばかしが目に入り、耳に入つた。然し王子は人民を塗炭の苦しみから救ふために内治外交に努めやうとはしないで、却つてこれを捨てやうと致された。内治外交によつて人の苦しみが救はれ、世が安樂になるとは思はれなかつたのである。國のために國が富み強くなるのは一階級のために一階級が富み且つ強くなるのと同じに思えたのである。富豪のために富豪が圖ることが惡いならば、一國のために一國が圖ることも惡い。眞箇に世の苦しみを脱し、人生の幸を樂しむがためには人間並の考は一變

しなければならぬ、出直さなければならぬ。斯ふ云ふのが釋尊の信念であつた。そこで釋尊は遂に王城を捨て、王妃を捨て、臣民を捨てて出家し大悟し、而して眞箇の救世主となられたのである。

既に出直された釋尊、既に人間並の考を一變された釋尊の救ひは誰にも解らなかつた。然し釋尊は百方手を盡して救ひの妙術を施された。「世の福樂は眞の福樂でない、世の福樂は苦しみの母である、世の一切は皆苦である、苦の種子である。汝等、若し苦を厭ふならば、世の一切を打捨てて、眞の安樂を求めよ、眞の安樂を求むるの道は、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を修するにあるぞ」と示された。

王子釋尊の出家によつてその恃怙を失つて世の苦しみに脅えてゐた人々は、釋尊の大悟出山を聞き、走つてその說法を聽いた。印度國中に割據する國々の人は敵も味方も走つて釋尊の說法を聽いた。

斯くして釋尊は人心不安の印度を救ひ、階級制度の苛酷を緩和め、飢えたるものを救ひ、怒れるものを宥め、愚かなるものを諭し、貴人野人を一堂に集めて、その法悅を喜ばしめられた。

二　釋尊の入涅槃

然るに釋尊は說法敎化四十年、御年八十歲で、その法席を閉ぢて入寂致されることとなつた。この時、五十二種の異類が集つて慟哭、血涙を流したといふが諒に然もあるべきことである。慈父とも慈母とも仰いでゐる大救世主、大人格者たる釋尊を喪ふては、五天竺國中は火の消えたやうなものであつたに相違ない。毘奈耶雜事にはその情況の一端を物語る記事がある。未生怨といふ王は釋尊の歸依者であつたが、釋尊の入涅槃を聞いたならば、必ずや熱血を歐いて驚き死するであらうと大迦攝波は考へ、そこで行雨といふ大臣と謀つて、釋尊

の一大記を畫師に描かした。釋尊が今生に生れられない前の世に覩史天宮にゐらせられたのであるが因緣熟するを見て天宮を下られ、摩耶夫人の胎内に宿られ、出生致され、城を出でて苦行林に入らせられ、菩提樹下に大悟致され諸方に說法せられ、拘尸羅城の娑羅双樹の下で涅槃に入らせられたといふことを委曲に描かし、これを未生怨王の御殿に掛けて置いた。王はこれを覩て、釋尊でも涅槃に入らせられるのであるかと行雨に聞いた。行雨は默つて一言をも發しなかつた。王は釋尊が涅槃に入らせられたのであることを知つて、號咷、悶絕、地を轉げ回つたと云つてある。

この一物語を見ても、釋尊の入涅槃が、どんなに悲しみ悼まれたかを知ることが能きる。

三　釋尊八相の化儀

諒に釋尊の入涅槃は悲しいことであつた。法孫たる我等もまた今猶ほこれを悲しまずにはゐられない。然し悲しんでばかりゐるのは男げないことで、大丈夫たるものの取らぬ所である。大丈夫たるものは順逆何れの境に於いてもよくそこに意義を見出さなければならぬ。石の片々が竹を打つ聲、桃の花が咲く色、これらにも深々の意味が含まれてゐる。況んや釋尊の入涅槃の如き大事件に、意味が無くてどうしやう、そこには無量不可思議の意味が無くてはならぬ。

大迦攝波は早くもここに眼をつけて、釋尊の入涅槃は、ただの凡夫が死んでしまつたのとは譯が違ふ、釋尊は衆生教化のために涅槃に入らせられたのである、全體釋尊がこの世に出現せられたのが、既に衆生教化のためであつたのである、覩史天宮から下られたこと摩耶夫人の胎内に宿られたこと、出生せられたこと、出家せられたこと、成道せられたこと、說法せられたこと、これらは皆悉く衆生教化のためであつたのであると說いた。

これは釋尊の入涅槃をただの入涅槃でなくして釋尊に深い思召があつてのことであると説いた抑々の濫觴であるが、これよりしては、謂ゆる釋尊の八相化儀といふことが説かれることとなり釋尊が應化身佛であることが明瞭するやうになつた。

釋尊八相の化儀とは要するに、釋尊が一切衆生を教化致されるに就いての八種の方法である、八種の教育方策である。その八種といふのは降天、託胎、出生、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃である。

世間にも身を以つて教育の事に盡すといふ言葉はあるが、この言葉を言葉通りに實行する人は恐くあるまい。唯獨り我が釋尊のみは、この言葉を言葉通りに實行された方である。世間の教育家はどんな偉い人であつても、生れながら教育のことに當る人は無い、いや生れるのが抑々教育をするがためであるといふやうな人は、まあ有るまいと思ふ。所で釋尊は全く、教育を徹底的に行るがために生れられたのである。既に出生が教育のためであつた位であるから、其後の出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃が教育のためであることは云ふまでもない。

四　入涅槃の化儀

所で釋尊は涅槃に入つて、衆生に何を教へやうと致されたのであらうか、涅槃の相を示して、何を教へやうと致されたのであらうか。これはもとより凡情を以つて推量ることは能きないけれども、私に惟ふに、釋尊は吾々衆生に、涅槃といふものを眞箇に會得さしたいといふ思召からであるに相違ない。

壽量品の中にも「衆生を濟度するがために、方便に涅槃の相を現はすのである、本當に死んでしまふのではない」。と仰せになつてゐる。更にまた釋尊は「涅槃に入つても休息してゐるのではなく、絶えず衆生を陰から教へ導いてゐるの

である。涅槃に入つて相を隠してゐるのは、迷つてゐる、衆生の目を醒ますがためである、迷つてゐる衆生も、我が隠れてゐると流石に我が慕はしくなり、我の舎利を集めて供養し、心を柔軟して、我を信じ、我に依らうとして一生懸命になる。さうなつた時に、身を現はして教を説くのである」。と仰せになつてゐる。

これらによつて釋尊が涅槃に入られた思召は伺ふことが能きる。「暫しこそ影をも隠せ鷲の山、高根の月は今もすむなり」で、釋尊は衆生濟度の御心お厚い所から、月の山影に隠れるごとくに身をお隠しになつてゐられるのである。我等法孫は釋尊のこの思召をありがたく思つて、釋尊が入涅槃の教化を無駄にしないやうに致さなければならぬ。

五　常住不變の解脱境

釋尊は「我を慕ひもとめて身命を抛ち來る衆生のために眞の正法を教へよう」と仰せになつた。その眞の正法とは涅槃のことであることは云ふまでもないが、扨てその涅槃はどういふものであらうか。これは自ら自命を抛ち、釋尊に歸命して、親しく涅槃を得た人でなければ解らぬ。然し從上の佛祖の指圖に隨がつてこれを伺ふに、涅槃の様子を現はすために、涅槃といふ字を意譯して、滅、不生、安樂、解脱、圓寂等といつてある。更にそれらの文字を解釋してある文を見るに、滅といふのは貪瞋痴の迷の因果を滅し盡したことをいふので、これを雜阿含經に「貪欲、瞋恚、愚痴、永く盡き、一切の煩惱、永く盡くるを涅槃と名づく」といつてある。

また不生といふのは具には不生不滅といふことで、生死を透脱してしまつたことをいふのであつて、この趣を雜阿含經には「道のために心を端しくし、意を正しうし、愚痴の心を去るべし、愚痴の心なくんば惡を行せず、惡を行せず

んば殃を受けず、殃を受けずんば死せず、死せずして卽ち涅槃を得」といつてある。

次にまた圓寂といふのは圓は圓滿で、德が十二分に備はり充ち滿ちてゐること、寂は寂滅で、煩惱妄想、束縛繫縛の一切を斷ち切つてゐることであつて、これを賢首大師は「涅槃は此に圓寂と言ふ、謂く德備はらざる無きを圓と稱し、障盡きざる無きを寂と名づく」といつてゐられる。華嚴大疏鈔には「義法界に充ち德塵沙を備ふるを圓と曰ひ、體眞性を窮め、妙、相累を絕するを寂となす」といつてある。

これらの滅の義、不生の義、圓寂の義等から推して見れば、解ることであるが、涅槃は煩惱妄想を斷ち切り、一切の繫累を離れて、あらゆる德操を具備した大自在不生不滅の安樂境である。而してこの妙境は叢雲を吹き拂ふ所に現はれる月の如く、煩惱妄想、惡智惡覺を捨て去つた所に現はれる妙境であることは、佛祖の言句、經典祖錄に示されてゐる所で明かである。

六　顯現の妙法

我等は釋尊に恭敬し歸命して、最上無二のこの涅槃の教說を信受奉行して、我等も早くこの涅槃を體得せんことを欣ふのであるが、世にはこの涅槃を信じないで、涅槃といふのは死滅の別名であるといつてゐるものがある、涅槃のこの大事實を大膽にも否定してゐるものがある。が實にあさましいことである。

釋尊はこれらの輩を憐れんで、涅槃といふ常住不變の大解脫境が永恆に存在することを說き示すために涅槃經の中には五因二因等を示してお諭しになつてゐる。

五因といふのは第一が生因、第二が和合因、第三が住因、第四が增長因、第五が依因である。その生因とは惑業である。この惑業によつて衆生の身心は生

ずるのであるから、惑業のことを生因といふのである。和合因とは善心と善法と、惡心と惡法と、無記心と無記法と、相和合することをいふのである。住因とは一切衆生の我見我慢等のことである、この我見我慢が因となつて凡夫の身がこの世に住するをいふ。增長因とは飲食衣服等をいふ、凡夫の身は飲食衣服によつて增長し長養されるをいふのである。依因とは父母の精血、國王の庇護をいふのである。凡夫の身が父母の精血によつて生じ、國王の庇護に依つて諸難を免れてゐるをいふのである。

これらの五因によつて存る所のものは云ふまでもなく、それらは、皆、生じ出て來たもの、段々に變化し大きくなつて來た所のものである。而して遂には滅んでしまう所のものである。次に二因といふのは生因と了因とであるが、その生因とは穀類の種子から米麥が生ずる如く、一切のものを生ぜしむる所の種子のことである。了因とは大智慧光明のことである。大智慧の光明は燈の暗を照して明了ならしめる如く、一切の迷暗を照して、八面玲瓏ならしめるから、これを明了ならしめる原因卽ち了因といふのである。

この二因の中、前の生因は物を生ぜしめる原因で、この原因によつて出て來る處のものは皆、發生、生起して來るのである、生れ出て來るのである。が、後の了因は物を明了ならしめる原因で、物を生起せしめる原因ではない、生ぜしむる力はないのである。この了因といふ原因から出て來る所のものは皆、出現、露現、顯現れ、來るのであつて、生れ出て來るのではない。

而して涅槃はこれら諸原因のどれから出るのであるかといふに、生因、和合因、住因、增上因、依因、乃至、生因、そのどれからでもない、ただその了因によつて顯現し來るのである。涅槃は顯現するのであつて生起發生するのではないと、釋尊は示されてゐる。卽ち涅槃は、「何處かに蒔いて置いた種子が漸次大きくなつて涅槃になつた」といふやうなものでなく、涅槃は過去の過去際よ

り、未來の未來際を盡して、變易するものではなき、常住不變の事實であるのである。常住不變の事實であるから了因のある所には常時も顯現するのである。これを釋尊は「我が諸の弟子、展轉して之れを行ぜば則ち是れ如來の法身、常に在して滅せざるなり」大に修し大に行する所にはいつでも涅槃は顯現するぞと仰せられてゐるのである。

七　有餘涅槃、無餘涅槃

釋尊の教化により、我等は如實の修行即ち了因によつて直下に涅槃が顯現することを會得した。が然し未だ會得し切れぬやうに感じられる所がある。それは何かと云へば、涅槃が顯現すれば吾々のこの肉身は直ちに冷たくなつてしまうのであるか、どうかといふことである。一般には人がその壽命が盡きて、生命を喪ふことを涅槃に入るといふ位であるから、「涅槃が顯現すれば肉體は死ぬのだらう」と思ふのは無理からぬことである。

釋尊はこの疑を明にするために、有餘涅槃、無餘涅槃といふことを說かれてゐる。有餘涅槃とはこの肉體を有ちながら得る所の涅槃であり。無餘涅槃とはこの肉體を失ふてしまつて得る所の涅槃である。

これで明である通り「涅槃が顯現すれば肉體は死ぬ」といふことはない。涅槃が顯現しても此肉體をその儘に持つてゐる人もあれば、此肉體を失つてしまう人もあるのである。而して此肉體をそのまま持つてゐる方と、此の肉體を失つてしまう方、卽ち有餘涅槃と無餘涅槃とどちらがよいのかといへば、どちらも同じである、その間に優劣上下の差別は無い。

釋尊の如きは久遠劫の昔に、發心、修行、菩提、涅槃を致されてゐる方であるのであるが、衆生を救ふがために、その涅槃の上に更に出生、出家、成道、涅槃といふやうな威儀を示されてゐる。して見ると釋尊肉體の死の涅槃が無餘

槃涅であることはいふまでもないが、その無餘涅槃に入らるる前の出生、出家、成道等は皆有餘涅槃の威儀であつたのである。

八　行持報恩

これでお互は十分涅槃を會得することが出來た。涅槃は死んでしまうことでなくして、窮窟な束縛を脱して、此の世ながらに不生不滅の眞實身となることであることが解つた。而してその涅槃は我等が如實の修行さへすれば直下に顯現する妙境であることが解つた。

ここに至つて我等は初めて、死の恐しさも、世のあじけなさも、全くこれを拭ひ去ることの能きる妙諦を徹底會得したのである。釋尊によつてこの妙諦を會得しその導きを得た我等は、釋尊のこの大慈を空しうせざるやう、專心一意、精進しなければならぬ。涅槃顯現の了因を富まさなければならぬ。この了因を豐にすとは別のことでない、三十七道品を修することである。三十七道品といつた所で複雜な道が澤山あるのではない。これを抽象的にいへば遺經に示されある如く、「波羅提木叉を尊重し珍敬する」ことである。淨戒を持つことである。これを具體的にいへば正業に從がひ、正命食を以つてその日夜を空しくしないことである。

斯やうすることが、涅槃顯現の直路であり、また釋尊に對する報恩であるのである。

佛家の三心

一　佛教徒の奮起を要す

生花は大層綺麗に見えるけれども、暫時くの間に枯れてしまふ。人形は一寸見たところでは眞物の人間のやうであるけれども、言葉を發するといふこともなければ、意志を表はすといふこともない。

生花の直ぐ枯れるのは根がないからである。人形の物を云はぬのは精神が無いからである。花として肝腎なるは根であり、人間として肝腎なるは精神である。

恁麼ことは今更とりたてて云ふべきほどのことでも無い、解りきつたことである。が、この解りきつたことであるだけに却つて閑却にされて、今日は肝腎

な精神のない人間が澤山にゐる。日本人でありながら、日本魂が無く、宗教家でありながら宗教心が無いといふ連中が隨分ゐると云ふことである。

過激なことを云ふ人は「現代の日本人に日本魂などは藥にしたくも無い」といひ、また「今日の佛教徒に信心などは爪垢ほどもない」といふ。併し、然う云つてしまふのは酷過ぎると老衲は思ふが、何にしろ、今日は精神の方は御留守になつて來てゐる。早い話が吾々の平生のことを顧みて見るがいい、着物は怎うなつたか、食は怎うなつたか、棲居は怎うなつたか、質素一點張の農家の人でも、素晴しい風をして、立派な家に住み美い物を漁つて食つてゐる。卽ち物質の方のことは太層變つて來た、はでになつて來たのである。然るに精神の方は怎うかといふに、昔の儘で少しも變つてゐない、いや却つて忘れられてしまつてゐる。

これは怎う考へて見ても感心すべきことではない。花の生命はその根である

ごとく、人間の生命は精神である、その精神が忘れられてしまつてゐたのでは、早晩亡んでしまうより外に道がない、誠に恐ろしいことである。今ここで忘れられてゐる精神を日本國中の人々に突きつけて、これを擧揚しなければ、悔ゐても取り返しのつかぬやうなことになる。吾々精神のことに因緣深いもの、卽ち吾々佛敎徒たるものが大奮發をしなければならぬのはこの秋である。吾々は立つて吾々の精神を宣傳しなければならぬ。

扨てその精神はといふに、これを現はすには釋尊を初め從上の祖師は種々の善巧方便によつて致されてゐるが、老衲はここに「佛家の三心」といふことを提示して、この講話を進めやうと思ふ。

二　菩提心

「佛家の三心」とは、第一菩提心、第二慕古心、第三求實心である。以下順を追ふて述べるが、先づ第一菩提心とは怎ういふことであるかといふに、菩提といふ字は梵語であつて、これを「覺」または「道」と意譯する。で菩提心を「覺心」といひ、また「道心」といふ。

覺心とは怎ういふことかといへば、法性を覺る心といふことである、「佛のやうな大智慧光明を會得せやうとする心」といふことである。

道心とはそれでは怎ういふことかといへば、大智度論にもある通り、「佛道の心」といふことである。「佛の大道を踏み行ふて行く心、一切の衆生を濟ひ導いて行くこと」のことである。

承陽大師は「菩提心とは度衆生の心なり」といつてゐられる。大師は「菩提心を道心といふ義に見てゐられるのである」。

併し、この佛の大道を踏み行ふといひ、衆生を濟度するといふことは、素凡夫がそのままゐて能きることでない、佛の道を行ひ、衆生を濟度すると云ふの

には先づ第一に各自が、その任に堪へるだけの人物にならなければならぬ、卽ち法性を覺らなければならぬ。

して見ると菩提心とは單に「眞性を覺る」といふだけのことでもなく、また單に素凡夫が「衆生濟度」の眞似をするといふことでも無い。菩提心とはこれを要するに、自ら「法性を覺り」また他をして覺らしむるといふことである。「所謂自覺覺他の大心大行」が菩提心であるのである。世間に用ひ慣らされてゐる言葉で云ふならば、菩提心とは道義的精神である。

世間の識者は今日の社會には道義的精神が全く無いと云つて憂ひてゐる、昨年末あたりからの東京の醜態は目もあてられぬ有樣であるが、これは何かと云へば畢竟は道義的情神が缺乏してしまつたからである。自分の行爲を反省する眼があり、人の迷惑を厭ふ心があつたならば、こうした醜いことにならう筈がない。

然しこの醜態は世間ばかりでは無い。佛教家の中にも、道義的精神の缺てゐる人がゐる、菩提心の無い人がゐる。生花式、人形式で、立派なやうでゐて、その根がなく精神が無いのが多い。今から七百年も前の承陽大師の御世にも、こういふ連中は少くなかつた。大師も「今の世に道心の者まれなり」と嘆いてゐられる。末法澆季の今日、道心の無い者が多いのは止むを得ぬことであるかも知れぬ。併し止むを得ぬといつて袖手傍觀してゐるのは吾等の面目でない。吾々はここに獅子奮進の勇を鼓して大に道心の涵養に努め道心を體驗し、徹底し實現するやう致さなければならぬ。

三　菩提心の功德

今日のやうに物質の方のことが幅を聞かしてゐる時には精神上のことは全く忘れられてゐるから、菩提心のことなどを大音聲に說きたてても、耳をかす人

は幾らも無いであらうが、深い佛縁あつて佛法を信じてゐる人達はそれは有り難く思つて、早く菩提心に徹底し體驗し實現するやうに致さねばならぬ。この菩提心には無量の功德が具はつてゐる、實に貴とい寶であるのである。華手經にも、「菩提心は譬へば優曇華の如し、この心は珍寶の如し、無價を以ての故に、この心は須彌山の如し、極めて廣大なるが故に」と言つてある、卽ち菩提心は優曇華の如く珍寶の如く却々に得ることの能きないものであり、須彌山の如く富士山の如くに廣大無邊の功德を具してゐるものである。

また瓔珞經には「三寶を信ぜずんば、わが大衆の中にありと雖も、われを去ること甚だ遠し。心堅固にして道心を棄てざるものは、われを去ること百千萬億由旬なりと雖も、われを去ること極めて近し」と道心の功德を讃へてある。卽ち道心さへあれば、菩提心さへあれば吾々は佛の淨土より百千萬億里隔つてゐやうとも、佛と共に起き共に寢ゐるのであると云ふのである。菩提心の貴いこと實に驚くべきものである。吾等佛教徒の最も切なる願ひは何かと云へば、佛と共に起き佛と共に寢たいといふことであるが、菩提心を體驗しさへすれば、それが能きるといふのであるから、こんな有り難いことはない。

更にまた諸法勇王經の中には「善男子善女人、過去の諸佛の恩を報ぜんと欲せば、菩提心を發すべし、未來の諸佛の恩を報ぜんと欲せば、菩提心を發すべし」。と說いてある。卽ち吾々が斯うして佛教を信じ、邪路に踏み入らないで無事安穩に活きて居られるのは、三世の諸佛を初め、歷代の祖師、ひいては國王、父母、衆生の恩であるのであるが、その恩に報ゐるに、怎うすればよいかと云へば、何しなくとも先づ第一に、菩提心を起すがいい、菩提心さへ起せば、直下に立派な御恩報謝が能きてゐるのであるとの教示である。菩提心の功德の廣大なることは、このことだけでも合掌讃歎するの外はない。

菩提心の功德廣大なことは、これらの經文によつて能く識ることが能きた、

吾々佛教徒として願ふ所の佛と共に起き佛と共に寢るといふことも、この菩提心を起す當處に得られる。吾々佛教徒として是非ともしなくてはならぬと思つてゐる所の御恩報謝といふことも、この菩提心を起す直下に致されるのである、致されるばかりではない、この菩提心を起すのが、佛と共に行住坐臥し、佛恩、君恩、親恩、社會衆生の恩に報ゆる第一義であるといふのであるから、實に尊いことである。

故にこの菩提心に徹底し體驗し實現することに精進しなければならぬ、この菩提心の遂行を吾々終生の行持であり目的であり主義であり奉仕であると心得なければならぬ。物質に醉ふて、これを追ひもとめてゐるやうであつてはならぬ。「君子食飽くことを求むることなく、居安きを求むることなく、事に敏にして言に愼む」といふことがあるが、食に飽き、居安きを求めまはるといふやうなことは、君子といはれ、紳士淑女といはれ、自覺ある人といはるる人々の深く愼しむべきことである。「貧にして道を樂しみ、富みに禮を好む」でなければ、精神をもつてゐる人間といふことは能きぬ。で吾々は先づ、物質に夢中になつてゐる夢から醒めて、精心主義の人となり、菩提心を徹底する人とならなければならぬのである。

四　慕古心

次は三心の中の第二慕古心である。慕古心は好古心とも云ひ、また稽古慕道心とも云ふ、古を慕ひ好むのが慕古心である。併し古を好み慕ふと云つても無暗やたらに、無方針で、古のものでさへあれば、何んでもかでも好み慕ふといふのでは無い。所謂稽古慕道で古を大に稽へた上で、その好むべきを好み、慕ふべきを慕ふといふのである。

然し今、老衲が慕古心を說くのを聞いて、何んだ舊るくさい、この新しいこ

と流行りの世の中にと云ふ人があるかも知れぬが、それは愚な見解である。いくら新しい人であつても、頭には天を頂き、足には地を踏んでゐるであらうが、頭には天を頂き、足に地を踏むといふことくらゐふるくさいことは無い、然しいくら古るくさくとも眞理はやはり眞理である。眞理はやはり眞理としてこれを認めこれを體驗して行かなければ、兎の毛一本動かすことも能きぬのである。

孔子は聖人として何人からも尊崇されてゐる人であるが、どうしてそんなに尊くなられたものかと云ふに孔子は自ら説いて「古を好む敏にして以て之を求めたり」と云つてゐられる。古を好み慕ふことを知らぬやうでは眞人間では無い。孔子の言行の如く、古を好み慕ふこと敏にして初めて、天地の大道にも合一することが能き、菩提心を徹底し實現することも能きるのである。

この大切な慕古心が、今日の人からは馬鹿にされてゐるのは實に痛惜事である。殊に宗教にあつては、この慕古心が生命であると云つてもよいほどである。

のにこれが無視されてゐるのは殘念なことである。古の聖賢、古の佛祖を慕はないで、宗教の生命が何處にあらう。古聖の心を心とし、古聖の行を行として、「佛祖の言句にあらずんばこれを言はず、佛祖の行持にあらずんばこれを行せず」といふまで徹底しなくては、本當の宗教味は現はれて來るものでない。こは新時代に處してゐる宗教信者たるものの深く心得べきことがらである。

然しこの慕古心を説くに當つて注意までに云ひ添へて置かねばならぬことは、先にも云つたことであるが、慕古といつたからとて、古のことにすつかり泥んでしまへと云つたのでないと云ふことである。昔し菅原道實公は和魂漢才といつてその時代の人達が漢卽ち支那を眞似て、一も二もなく支那式、支那式で行り、支那の文化に現をぬかしてしまつてゐるのを誠しめ、支那の文化を取るは誠に結構であるが、その文化を取り入れて身の裝束をしてゐる間に、心までを支那風にしてしまつてはならぬ、吾等は日本人であつて支那人では無いのだか

らと云はれたと云ふことであるが、諒にご最の事である。今日の人は支那風には染まぬけれども、洋風に染まつてゐる、西洋のことでさへあれば、何んでもかでも模倣するのを得意がつてゐる。今日道實公が出て來たら、和魂洋才を提唱して、洋風もいいが心だけは日本魂をと師子吼されるであらう。老衲もこの和魂洋才には賛成である。我が國の物質的の方の文化は確に西洋に劣つてゐるからそれは大に取り入れて所謂洋才を十分に發達さするがよいと思ふが、魂は西洋風にしたくない。前來、慕古心を盛に說いてゐるのも、この魂を無暗に新しくしてしまはないで、何千年來、吾々のこの魂を涵養するがために盡くされた古の方々を慕ふて、益々この魂を練りあげて行かなければ不可と云つてゐるのである。

が然し、此處が大變難しい處で、間違ひの起り易い危險所である。所謂才は漢才を取つたり洋才を取つたりする、卽ち支那の模倣をする、が魂は昔ながらの日本魂を養つて行くやうにするといふことは、口で云ふには雜作ないが、實際行ふ上には實に難しいことである。段々氣候が暖かになれば衣服を更へる、寒くなればまた更へる、更へれば自ら心持ちも變つて、遽に春めいた氣持ちになつたり、俄に冬が來たことを泌々感じたりするものである。衣服を着更へながら心持ちだけは變はらぬやうにといつても、それは難しいことである。

併しいくら難しいからと云つて、怎うも仕方無い。次から次と心を更へて今日は露西亞魂に明日は獨逸魂に明後日は阿弗利迦魂にと云ふやうなことだつたら大變である。どんなことがあらうと魂を變へてはならぬ。ここが新しい時代の人達の骨折所である。が新時代の人はうんと新しい才知も磨くが、また一方では、うんと慕古をする、昔聖先賢を慕ふて行く、斯う致さなければならぬ。然うしさへすれば、何等の危險も無くして立派に日本人たり、佛教徒たり、道人たるの面目が發揚されるのである。

五　慕古心は進新の基礎なり

古を慕ふ心が人間には無くてならぬ心であることは既に述べた通りであるが、この慕ふべき古を有つてゐる吾々は幸である。鑒るべき歴史を有つてゐる人は幸である。「米國は大きな金持な國であるけれども米國人として鑒るべき歴史を有つてゐない、鑒るべき歴史を有つてゐないから、米國は怎うも國としての治がつかぬのだ」といふことを聞いたことがあるが、成程然うであらうと思ふ。我が國の如きは萬古不磨の尊い歴史がある。一朝、事ある場合にも事なき場合にも、これに鑒みこれに據つてその態度を決することが能きる、新に進む道を會得することが能きる、更に云へば歴史に押し進められて行くのである。

ここで歴史といふものがそれほどの力のあるものであると云ふことは暫時く說くことを見合するにしても、歴史を慕ふ、古を慕ふといふことによつて、吾等が得る所は非常なもので、吾等は古人の長所をよく洞觀が能きる、而してその長所は直に取つて以て自分の短所を補ふことが能きる、同時にまた古人の短所も目に付くであらうが、矩所は短所でまた自分の短所を反省上の助になる。

斯ういふ風に古を稽へ慕ひ鑒るといふことになればそれが直に新に進むことになるので、これを論語には溫故知新といつてある。即ち故を溫ねること古を慕ふことが、新を知る所以である、新に進む所以であるといふのである。

難しく論じなくとも、實際行つて見れば直ぐ解る。古人の道德を見、古人の操行を慕ふてゐれば、自ら自分の道德が進んで來る。操行がよくなる、品性が改造される。凡ての事が淨化されて來る、なすことすること、學問も修行も水際だつて進んで來る。

新思想といひ新文化といへば、古のことなどとは緣もゆかりもないことのやうに思ふけれども、決して然うでない、新思想、新文化を產み出したものは何

かといへは皆それは此慕古心、稽古慕道心から生れたものでなく、突然そこへ飛び出したものであるならば、それは夢幻のごとく、泡沫のごとく、忽ち消え失せてしまはなければならぬほんの一時のいかさまものたるに過ぎぬものである。であるから吾々は自ら進んで新しい意義あるものを作り出す上にも、また他から輸入された新しいものを取る上にも、この慕古心、稽古慕道心を閑却してはならぬのである。

我が教祖釋迦牟尼佛を初め、承陽大師、常濟大師の行蹟を慕ひその德操を慕ひ、一事一行も、佛祖に違背せぬ覺悟でいたならば吾々の心身は如何に淨化され、如何に醇化され、向上することであらうか。

六　求實心

以上で佛家の三心の中の二心を述べた、今度は第三の求實心である。

求實心とは讀んで字の如く、眞實を求める心と云ふことである。いくら末法澆季でも自ら好きこのんで、虛僞、欺瞞を求むるものはあるまいけれども、一寸の由斷から大變な邪路へ這入つて虛僞、欺瞞を行るものである。世が開けて、文化が複雜つて來れば來るほど、虛僞、欺瞞が多くなる。爰に於て、愈々益益聲を大にして求實心を說く必要がある。

扨てその求實心の眞卽ち眞實のことであるが、佛家で云ふ所の眞實とは、學問をして初めて得られるとか、修行して後に得られるとかいふ何處かかう遠方にあるやうな氣のする眞實とは違ふのである。智慧のある人も無い人も、利巧も馬鹿も、皆一樣に餘さず飲さす有つてゐる所の眞實をいふのである。だからこの眞實は求める心さへあれば何人でも直下に得ることの能きる法である。

然るに世間の學問や、教相學問に慣れた人は、眞實を求るといふからには、先づ今日のことであるから、一般科學、哲學、それから通佛教の學等、內外の

學問を一通り行つて、知識が十分貯へられてから、然る後に、その眞實を求むるでなくては本當の眞實は得られるもので無いと云ふ。成程然う云へば佛家の樣子を知らぬ人は御最の御說と思ふであらう。が、そんな說をなす人は、佛家の眞實はもとより、佛家といふものの性質さへも心得てゐないのである。そんな愚物は釋尊の在世中にもあつて、釋尊から叱られたことがある。釋尊はその愚物を諭すに毒矢の諭を以つてしてゐられる。「こゝへ毒矢が飛んで來て突つ立つたらお前は怎うするか、昔も或る所で毒矢に射貫された男があつた。その親族、知人は爲めに醫師を招いて、毒矢を拔かうとした、すると、當の本人はこれを制し、まあこの矢は拔かないで呉れ、拔き取る前にすべきことがある、この矢を射たものは何處の誰れであるか、矢は東から來たか西から來たか、矢を作つた人は誰れか、矢の色、矢の形、曰く何、曰く何と、小面倒に一々調べた上でなくてはこの矢を拔いてはならぬと云つた。然しそれらのことが一朝一夕に調ばるものでない、その傷人はそんなことを云つてる間に矢の毒が回つて死んでしまつたといふことである。お前もそんな愚物の仲間に入つてはいかぬぞ」と誨られたと云つてある。これは何も昔ばかりの話で無い。學問や事の穿鑿にのみ、拘はれてゐる人は斯うした失策に陷り易い。老衲は科學や哲學それからまた佛教の學問を無駄事であると云ふのでは決して無いが、どうかすると、そのことのために、佛家の眞實を妙に遠い所へ持つて行つてしまうのを甚だ遺憾に思ふのである。

まあこれ位に說いて來れば、佛家の眞實が學者の云ふやうな「眞實」といふものでないことは解つたであらうが、それではその佛家の「眞實」とはどんなものであるかといふことになるのである。が、佛家の眞實とはこれであると說き示すことは能きかねるので諒に困つたものである。

古人も說示一物卽不中といつて、これが佛家の眞實といふ者であると說き示

しでも仕様ものなら、それこそ大變だ、大詐僞だ、何故かといへばこれが佛家の眞實であるなどと提示した時には、もう佛家の眞實は何處へか行つてしまつて、そこへは影法師だけが殘つてゐるのであるからであると云つて居られる。いかにもその通りで、佛家の眞實は人に說いて示すことなどの能きるものではない。自分で親しく會得し體驗する人のみが、成るほどと首肯くことの能きるものである。でこの佛家の眞實ばかりは自ら會取し體驗するの外はない。

それではその佛家の眞實を人々が自ら會取し體驗するには怎うするかと云ふに、それは前々說いた所の菩提心を體驗し實現することにある。稽古慕道心を涵養ひ徹底することにある。卽ち菩提心と慕古心の二つの足をしつかりとこの大地に踏みつけて、白象が前へ進むが如くに、とつしりぐーと精進して懈怠することがなければ、その一足一足の上に、佛家の眞實を會得し體驗することが能きるのである。

で、これを要するに、佛家の求實心とは、人々平生の行履を如實にしこれを味さぬやうに致さうと精進する心をいふのである。而してその平生の行履を如實にし精進するには怎うするのかといへば、それは菩提心と慕古心との二つを常に離れぬやうに致すことであるのである。

七　三心卽一の妙法

全體この求實心と菩提心と慕古心この三心は三心であつてまた一心である。求實心を徹底するには、菩提心と慕古心に徹底しなければならぬ。菩提心や慕古心を徹底するには求實心を徹底しなければならぬ。若し佛家の人にして、此の三心卽一の旨を信じないならば、その人は本當に佛家の消息に通じた人では無い。從上の祖師方はこの三心卽一の旨を信じ、これを徹底するがために苦辛されたのである。永平寺の二代孤雲懷奘禪師が、比叡山にあつて學問をしてゐ

ながら、これではまだ十分でないと思召し、山を下つて一切の學事を拋ち、承陽大師に參じられたのは何かといへば、菩提心、慕古心、求實心の三心を徹底し三心卽一の妙法を會得するがためであつたのである。比叡山上には無論學問は盛であつた。然し三心に於いて缺ける所があつたから、孤雲禪師は遂にそこを下られたのである。總持寺の二代峨山禪師も初め天台の學者であつたが、遂に常濟大師に參じて、眞實の佛者になられた。これ亦天台の學僧としては佛家の綱領たる三心を圓滿することが能きなかつたから、それを止めて、三心卽一の妙法に徹底することに精進致されたのである。吾等佛教家を以つて任じ佛教徒たることを悅んでゐるものは深くこの旨を會得し、佛家の三心卽一の妙法に徹底し體驗しこれを實現することに力めねばならぬ。三心卽一の妙法に徹底し體驗し實現する所に、當天長劍、縱橫自在、殺活臨時といふ妙力も現はれる。

生花や人形では仕方が無い。老衲は切に望む、吾等佛教徒、殊に禪者たるものは、早くこの三心に徹し、秋風落莫の教界を挽回し、一華開五葉の春色を滿天下に雨ふらし、身心徧歡喜の法悅を一切衆生と共にするやう精進致したいものである。

八　當處の一念

何事も志が肝要である。人々各自の卽今の一念が大切である。この一念、鬼を念ずれば鬼となり、佛を念ずれば佛となる。此の一念を以て眞實に道心を起せば自然にそれが稽古慕道の心となる、稽古慕道の心を起して古人に親み、古人を尊み、古人を憧憬すれば、その當處に、道心が實現する。この道心實現の當處は直にこれ眞實不疑の地である。この眞實地、これは決して遠方にあるのでない、卽今、一念心の轉處にある。之を誠にする處にある、眞となり、僞となる、唯現今の一念心にある。であるから眞實に道心を起すがよい、眞實に古

人に親むがよい、その直下に眞實地が出現するのである。

冀くはこの處に猛省一番してもらひたい。老衲はこの四月より、京都市外大宮村字紫竹林、安泰寺境内に紫竹林學堂を開設し、有志の學人を挂錫せしめ、專ら曹洞宗宗乘の蘊奥を研究し、且つ通佛教の要義を修し國家社會に貢献し、以て四恩に報答したいと思ふがこの學堂の壁書にも、佛家の三心を掲示し、佛家の精神、目的、主義に徹底したいと思ふ。

怎うか諸君、意義深き一生を、生花式、人形式に終らぬやうにしてもらひたい。

聖誕の釋迦牟尼佛

一　調度

一軒の家にも其家相應の調度がある、道具がある。軍隊には軍隊の調度があり、政府には政府の調度がある。國には國の調度があり、世界には世界の調度がある。家に調度が無ければ家でなく、軍隊に調度がなければ軍隊でない、政府に調度が無ければ政府でなく、國に調度が無ければ國でない。軍隊の編成方式、軍隊の兵器は軍隊の調度である、國の立法、司法、行政等の機關は國の調度である。

併して此の調度は、家の調度、軍隊の調度、社會の調度、國の調度、その何の調度たるに論なく、その調度は常にその調度の主　卽ちその調度を使用する

所の主と不一不二のものでなくてはならぬ。離ること能きぬものでなくてはならぬ。調度と調度の主とは固より一ではない、調度は調度、調度の主は調度の主である。而し調度は調度、調度の主は調度の主でありながら、調度と調度の主とが不二でなければならぬ、調度と調度の主とが親しくなつてゐなければ駄目である。

此頃は改造とか革命とかいふことが流行る、改造もよし革命も悪いことはない、然しいくら改造をし、革命をした所で、その改造され革命されたものが、改造し革命した所の人と親しくなつてゐなければ駄目である。調度と調度の主とが親しくなつてゐなければ駄目である、借りて來た改造や、心にもない革命では、一時は手際よく能きたやうに見えても、そんなものは何にもなつたものでない。調度の改造や革命をいたすにしても、その調度の改造や革命が、その調度の主、卽ちその調度を使用する所の者の本性から、法爾如然に顯れる所の改造であり革命でであらねばならぬ。

我が佛家にも改造を要し革命を要する調度がないでは無い、併しそれは枝末の調度に就いてのことで、佛家の根であり幹である所の調度には、改造や革命を要すべきものが一つもない。我等佛子はこれを有り難く信受し、佛家の調度に憑り、佛家の調度を活用し、以て佛家の聖業たる衆生教化、轉迷開悟を爲すべきである。

二　佛家の調度

――三十七菩提分法――

佛家には調度が澤山ある、三十七品苦提分法、四種の攝法等は皆これ佛家の調度である。

三十七品菩提分法とは四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八

正道といふ三十七種の道法のことである。世間の教育でも、尋常一年二年三年四年五年六年、中學一年二年三年四年五年、高等學校一年二年三年、大學一年二年三年と順次その教育の階級がある如く、佛家の修行精進にも漸々の段階がある。併しこの段階といふべきものには必ずしも前後深淺の差別があるといふ譯のものでない。世間の教育にしても、二年でやること丶三年でやること丶深淺や上下の差があることもあるが、ただ便宜のために、二年で教へることにしたり、また三年で教へることにしたりしてあることが澤山あるが、それと同じで、佛家の三十七通りの道品にも必ずしも前後があり深淺がある譯ではない。然し大體に於ては順序があるから、その順序に從がつて、この三十七の道品を述べやう。

初めに四念處とは五停心といふ修行によつて貪瞋痴我見散亂といふ五つの煩惱忘想を無くした人の修する觀法である。卽ち一つには身は不淨である、愛著すべきものではないと觀ずる。二つには受は苦なりと觀ずる。卽ち我々の日常經驗は悉く苦である苦しみの種子であると觀ずる。三つには心は常に移り變つてゐるものである。昨日の心と今日の心と同じのやうに思つてゐるけれども、その實毎日毎夜、心は一刻も止まらずに變化してゐるものである、おれがなどと我見や我慢をたてるのは酒醉が目をまはして家がまはる山河が崩壞るといふと同じであると觀ずる。四つには一切萬法は永恆に存するものでない、動產も不動產も金も名譽も何時々々までもそのままに保持される處のものでない、鐵も腐る石も壞れる、一切のものは必ず消滅するものであると觀ずる。この四つの觀法これを四念處といふ。この四念處によつて我々が不淨を淸淨と思ひ、苦を樂のごとくに思ひ、無我であるのに我がある如く思ひ、無常であるのに常住であるが如くに思ふ所の四つの轉倒心を改め、純眞の淨きもの樂しきもの大我なるもの常住なるものを體得するのである。

次は四正勤といふ道品である。正勤といふ文字に現はされてゐる通り、此四正勤とは四つの正しい勤行をいつたものである。四つの正しい勤行とは、已になした處の悪を悔ひて再びなさぬやうにし、未だなさざる悪はこれを爲すことのないやうに注意し、已になした所の善はこれを益々すやうにし、未だ爲ざる處の善は進んでこれを爲すやうにする、この四つを四正勤といふのである。この四正勤とは要するに悪を捨て善を求めて専一に勉勵することである精進することである。

次には四如意足、これは四神足とも云ふ。願ふ所成らざるなしといふ境界を云つたもので、修業によつて現はれた德によつて、その名をつけてあるのである、軍人に斯く〳〵のことを爲さねばならぬと云ふ代りに斯く〳〵のことは金鵄勳章ものだといふと同じである。で四如意足とは修行の項目でなく、修行によつて現はれる所の德目をあげたものであるとは解つたが、それではその德が現はれるまでに要する修行とは何であるかといふに、それは坐禪である、四種の定である。四種の定を修することによつて四如意足といふ德が現はれるのである。

次に五根、これは信根、精進根、念根、定根、慧根の五つを云ふのである。この根とは草の根、樹の根でこの根がなくば草木は枯れるが、恰度それと同じで、佛家の人はこの五つの根がないと死んでしまう、佛家にゐるから佛家の悦びも得られぬと云ふやうなことになる、そこでこの五つは大切の根であるから、枯らしてはならぬぞと示してあるのである。その信根とは信心深いこと、精進根とは懈怠ないで驀直に勉勵すること、念根とは正しい佛の教を憶念して忘れぬやうにすること、定根とは心を落ちつけて散亂せしめぬこと、慧根とは正法を見破る智慧の光を暗まさぬやうにすることである。

次に五力。これはまへ既に述べた五根が益々その勢力を増し、不信、懈怠、

忘却、散亂、無智といふやうな障礙を取り除くやうになつたことをいふのである。

次に七覺支。道を悟る上に七種の大切のことがある、それをこゝに七覺支と云つたのである。その第一が擇法覺支、智慧の光に照して一切の善きこと惡しきことをよく見分け知り分けること。第二が精進覺支、大勇猛心を以て精進して懈けぬこと。第三が喜覺支、善き法を得てこれを行ずることを喜びとすること、第四が輕安覺支、身心を輕安にすること。第五が念覺支、常に定慧均等卽ち禪定と智慧とを均等に持つてゐることを念とし、禪定にだけ偏るとか智慧にだけ偏るとかいふことの無いやうにすること。第六が定覺支、心を一境に注いで散亂せしめぬこと、移り氣でないやうにすること。第七が行捨覺支、一切の妄法に頓着せぬこと。以上の七つを七覺支といふのである。

次は八正道。第一が正見、ただしい見解である、佛の教を正直に間違ひなく信じてゐる心である。第二が正思惟、まへの正見を益々培養ふてゆくこと。第三が正語、正しい心をそのままに正しく言つて嘘僞を云はぬこと。第四が正業、嘘僞を云はぬのみならず、嘘僞の行をせぬこと。第五が正命、身も心も口も淸淨にして、佛家の人として爲す間敷きやうなことは斷じて爲さず、正しい行爲をして正しい生活をすること。第六が正精進、正しく精進して横道にそれぬこと。第七が正念、邪な念を起さぬこと、第八が正定、正しい禪定を修して邪禪や野狐禪をなさぬこと。以上の八つを八正道といふのである。

これで三十七の菩提分法を述べたのである。これを見れば誰れにでも解ることであるが、この三十七の道品は、我が佛家の調度である道具である、食厨まはりの平常の道具である、片時もなくてはかなはぬ道具である。我が佛家には斯くの如き調度がある、がこれでその調度が全部であるのでは無い、この外にも澤山あるが、こゝには今一つ四種の攝法といふ調度を說いて置かうと思ふ。

三　佛家の調度

――四　攝　法――

承陽大師は「衆生を利益すと云ふは四枚の般若あり、一には布施　二には愛語、三には利行、四には同事これ薩埵の行願なり」と云つてゐられるが、誠にその通りで、衆生を利益すと云ふ上の調度をいへば、この四つである、その第一の布施、これを承陽大師はお示しになつて「布施といふは貪らざるなり」「其物の輕きを嫌はず、その功の實なるべきなり」「一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる一錢一草の財をも布施すべし」「但彼れが報謝を貪らず自らが力を頒つなり」と仰せになつてゐる。卽ち布施といふことは貪らざるなりで、布施する人も、布施される人も布施物も、寸毫の疚しい所もないものでなくてはならぬのである。品物を貪つたり、恩返しを貪つたり、評判を賣物にしたりするのでは、いくら布施を澤山した所で何にもならぬのである。第二が愛語、これは衆生の根機に相應する慈愛の語をかけてやることである、「德あるは讃め、德なきは憫んで、衆生を敎てゆくことである。第三利行、これは自利利他俱利といふ大行をなすことをいふのである、「愚人謂はくは利他を先とせば自らが利省かれぬべしと、爾には非ざるなり」「利行は一法なり普く自他を利するなり」で、利行といふものは正しくさへ致せば、自分の利益にもなれば他の利益にもなるものであるから、正しい行持をなせといふことである。第四が同事之は同事行と云ふことで勞働者を導くには勞働者となり、資本主を導くには資本主となつてやる、女にもなれば男にもなる、盜賊にもなれば乞食にもなる、天使にもなれば惡魔にもなる、所謂觀音の三十三身で、何んにでもなつて親しく敎導くことをいふのである。

四　佛家の調度

――調度としの生死――

以上佛家の三十七の菩提分法と四種の攝法とを說いたが、この三十七菩提分法の方は主として自分の修行上のことであり、四攝法の方は主として他を導く上のことである。でどちらも大切で優劣はないが、佛家では「われ佛にならずとも衆生を渡す僧の身ならん」で、自分よりも他を大切に思ふのであるから、三十七菩提分法よりは四攝法の方が重く見られてゐる、四攝法は軍隊に於ける大砲か飛行機にも比すべき最も緊要な調度である。

佛家では右の調度、道具を使ふのであるが、抑々この調度を初めて使はれた方は誰であるかといへば、我が教祖釋迦牟尼佛である。釋迦牟尼佛のなされたことは一から十まで十から百まで、悉くが皆佛家の調度である、生も死も出家も成道も悉く佛家の調度となつてゐる。我々の生死は迷ひの生死で、佛家の調度でも何んでもないが、釋迦牟尼佛の生死は實に佛家の調度であるのである。釋迦牟尼佛の生死は生死透脫の上の生死で、所謂「非生に現出し、非滅に現滅し、衆生教化今猶止むことなし」であるのであるから、釋迦牟尼佛の生、釋迦牟尼佛の死は佛家の調度である、衆生教化の道具である、吾等が今、釋迦牟尼佛の降誕を祝し、灌佛會を營み、花まつりをなすに當つても、ここの趣旨を忘れぬやうに致さねばならぬ。

五　釋尊應化の降誕

釋迦牟尼佛は今を去る二千九百五十年、中印度、迦毘羅城の城主の太子として降誕致された方である。母摩耶夫人がお國である隣國の拘利城へ歸つて太子を降誕せしめ參らせんとて立ち出でられた途上、藍毘尼園に於いて玉の王子を

お生みになつたが、この王子が卽ち我が教祖釋迦牟尼佛である。この年は我が國で云へば神武天皇の卽位紀元九十六年のことで鳥歌ひ花笑ふ四月八日の早曉のことであつた。父王の淨飯王これを聞き大いに喜ばれ、悉達多と稱せられた。悉多達と云ふのは目的成就といふ字であつて、父王は太子の降誕を喜びこれで我が望みが成就したと仰せられたから、それをそのまま太子の名として悉達多と名づけられたのである。傳ふる所によれば、釋迦牟尼佛が降誕致されたその時、雙龍が天下り、甘露を雨ふらして釋迦牟尼佛を恭敬した、釋迦牟尼佛はまた周行七歩して、一指天をさし、一指地をさして、「天上天下唯我獨尊」と仰せになつたといふことである。

この釋迦牟尼佛の降誕を喜びこれを記念するために佛家では年々歳々四月の八日には灌佛會を營み、此頃はまた「花まつり」をも修することゝなつた。本年はその花まつりが大々的に各地で行はれるのであるが、誠に結構なことである。

釋迦牟尼佛の降誕は一應申せば只今申す通りであるが、これは地上に生れられた方を地上に生れられた方として見ただけであつて、これだけでは十分とは云はれない。釋迦牟尼佛の降誕に就いては未だ申し殘されてゐることがある。それは何かと云へば、釋迦牟尼佛の降誕は單なる降誕でなくて、應化の降誕、衆生教化の降誕であるといふことである。

南本涅槃經の月喩品には「人は月の現ぜざるを見て皆月沒すといひて、沒想を爲せども、而もこの月の性は、實に沒なし、轉じて他方に現ずれば、かの處の衆生は、また月出づと爲せども、而もこの月の性は、實に出づるなし、何を以てのゆゑに、須彌山の障ふるを以てのゆゑに、現ぜざれども、この月は常に生じて、性に出沒なきなり。如來應正遍知もまた〳〵かくのごとし、閻浮提に父母あるを示せば、衆生は皆如來生るといふ、閻浮提に涅槃を示現すれば、諸

の衆生は、皆如來實に般涅槃せりといふ、たとへば、月の出沒のごとし、如來の性は實に生滅なし、衆生を化せんが爲めのゆゑに生滅を示すのみ、この方の滿月を餘方には半を見、この方の半月を餘方には滿を見る、閻浮提の人、この月の初を見れば、皆一日といひて、初月の想を起し、月の滿つるを見れば、十五日といひ、盛滿の想を生ず、而もこの月の性や、實に虧盈なく、須彌山にありて增減あるのみ、如來も亦爾り、閻浮提に於て、或は初生を現じ、或は涅槃を現じ、始生を現ずる時は、なほ初月の如く一切皆童子初生といふ、七歩行くは、二日の月の如く、或はまた示現して書堂に入るは、三日の月の如く、出家を示現するは、八日の月の如く、大智惠微妙の光明を放ち、能く無量衆生の魔衆を破るは十五日盛滿の月の如く、或はまた三十二相八十種好を示現し、以て自ら莊嚴して涅槃を現ずるは、たとへば月蝕のごとし、かくのごとく衆生の見る處同じからず、或は半月を見、或は滿月を見、或は月蝕を見れども、而もこの月の性や、實は之れを增減蝕暾するものなく、常にこれ滿月なり、如來の身もまたかくのごとし、このゆゑに名けて常住不變といふ」とある。

これにいかにも鮮かに示されてゐる通り、釋迦牟尼佛の降誕は實に應化の降誕、衆生濟度の爲の降誕、佛家の調度としての降誕であることを知らなければならぬ、衆生を濟度するための降誕、衆生を教育するがための降誕、斯ういふ降誕は釋迦牟尼佛以外には何處にもないであらう。釋迦牟尼佛の降誕は吾々衆生の迷夢を破る一大光明である。天上天下唯我獨尊の獅子吼は、百千萬の猛獸、魑魅魍魎を粉微塵に碎き去つてしまふ所の大砲彈である、全體、吾々も亦、釋迦牟尼佛と寸分異ることなき佛家の人であるから、その出生は佛家の調度であり、その身口意三業は天上天下唯我獨尊底のものでなくてはならぬのであるが、迷妄のために轉倒して、それが解らずにゐる。賤人となり、破落黨となり、沒意智漢となつてゐる。釋迦牟尼佛が降誕して、天上天下唯我獨尊と獅子吼せら

れたのも、實はこの我々衆生の轉倒、妄想、沒分曉を打破るがためであるのである。我等佛子たるものはここを有り難く思つて、早くその轉倒を止め、迷夢より醒めて、釋迦牟尼佛と同一眼に見、同一耳に聞くと云ふやうにならなければならぬ。

魑魅魍魎、百鬼夜行の今日、斯くのごとき意味ある釋迦牟尼佛降誕に遇ふといふことは、吾等地上に棲むものの此の上もなき幸福である、全世界の光榮である。啼く鳥の聲、笑ふ花の香、吹く青柳の姿、飛ぶ鳥の影、ありとある一切の萬法は釋迦牟尼佛の降誕を壽き、釋迦牟尼佛の獅子吼を讃へてゐる。

六　釋尊內證の降誕

四月八日藍毘尼園の降誕を悅び、その應化を讃へ來つた吾々は更に進んで、釋迦牟尼佛內證の降誕といふことを述べなければならぬ。

釋迦牟尼佛內證の降誕とは、釋迦牟尼佛が內的に、如實に、天上天下唯我獨尊と云ふ自覺を親しく得られたことを云ふので、所謂見性悟道、悟のことをいふのである。この降誕は釋迦牟尼佛と雖もただでは得られない、修行によつてこれを得られるのである。無上依經には「如來は衆生の心內にあれども、衆生の理の如く如來を見ず。この故にわれ說いて具に聖道を分ち、無始の相結覆障を開解し、諸の衆生をして聖道力によりて、相結を破除し、自ら能く理の如く、如來の眞實平等を證見せしむ」とあるが、これは衆生が如來に相見する、卽ち證を開くことに就いて云つてあるのではあるが、釋迦牟尼佛も亦、衆生と同じく、聖道力卽ち先きに云つた八聖道によつて、如來の眞實性を證見されたのである。悟を開かれたのである。釋迦牟尼佛が眞箇の釋迦牟尼佛となられたのである。更生されたのである、降誕されたのである。吾々は四月八日の降誕を恭敬讃仰すると共にこの內證の降誕を信受奉行することを忽に致してはならぬ。

古來、禪宗では四月八日の降誕、應化の降誕を讃仰する點に於て、他のどの宗派にも劣つてゐないが、また、この内證の降誕を尊重し恭敬すること、他の宗派に冠絶してゐる。或る人の降誕會の語に、不從兜率天邊下　豈自摩耶胎裡生、といふのがある。卽ち釋迦牟尼佛は兜率天から下つてこの世に入り、摩耶夫人の胎内に宿られ、藍毘尼園で出生致されたといふけれども、内證降誕の釋迦牟尼佛は、天から下られたのでもなく摩耶夫人を母として生れられたのでもなく、相結覆障を打破する直下に降誕されたのであるといふのである。この内證降誕を祝することを忘れてはならぬ。眼華を拭ひ去つて社會の全面を見るに、宗教界では毎年四月八日に、日比谷公園に莊嚴な花まつりが行はれ、今年などは大部大仕掛に營まれるといふことであるが、日比谷の公園などばかりでなく、内的公園、卽ち心の中の花まつりをも大に營むやうに致したいものである。大に反省し大に戒飭したいことである。宗教界ばかりではない、政治界は怎うであるか、經財界は怎うであるか、正義もなければ人道もない。滿鐵の騷が出れば、珍品五箇で應酬する、臭口を以て臭言を吐く、その間にある國民は鼻もちのならぬ有樣である。本心内證の花まつりの風光にも接して、渾心渾身の雜穢、欲張り根性、虚僞の心根を捨て去つてしまひたいものである。

七　佛恩報謝

以上、釋迦牟尼佛の降誕祝賀に因み、佛家の調度を述べ、進で釋迦牟尼佛の降誕に二種あることを說き、四月八日の降誕も忝いが内證の降誕も有難い、形式上の降誕ばかりに泥んで、精神上の降誕を忘れてゐるやうなことのないやうに愼まなければならぬことを講じ來つた老衲は、この講話を終るに當つて、釋迦牟尼佛の恩愛の廣大無邊であることを述べ御恩報謝の道を講じなければならぬ。我等が斯うして正道を悅び正道を踏み行ふことが能きるといふのは、全

く釋迦牟尼佛の庇護である。

お互はこの洪恩に報ゐなければならぬが、海山の深く高きも及ぶことなきこの大恩に、怎うして報ゐられるかといふに、承陽大師は「その報謝は餘外の法は當るべからず、日々の生命を等閑にせず、私に費やさざらんと行持するなり」と仰されてゐる。日々の生命を等にせず、私に費さざらんと行持するなりとは、先きに說いた所の佛家の調度、とりたてて云へば八正道を修證し、轉迷開悟、理の如く如來を見、如來と同生同死、佛と共に起き佛と共に寢ねるやうにすることである。衆生の心水淸ければ菩提の影中に現ず、何んでも欲心、妄心を洗ひ去つて、心を淸かに澄ましむれば自ら本性佛が降誕する、眞の降誕佛の供養が能きる、如實の花まつりが能きる、報恩謝德が能きるのである。

湘南禪話

眞夏が來ても湘南は餘り暑くない。始中終、冷しい風が吹いてゐる。南風の少し强い日などは汐が霧の樣に吹きたつて、綠の山が見えなくなる位である。夏には無くてならぬ扇子も團扇も此處では用が無い。

此間も來客があつて、こんな話をした。そのはづみに麻谷寶徹禪師が曾つて或る僧のために示された風と扇子の話をしたが、ここにもそれを話すことにしやう。

麻谷寶徹禪師は支那唐朝の偉僧で、猫を斬つて評判になつてゐる南泉普願禪師と弟子兄弟である。此頃の樣な酷暑の日であつたであらう、その麻谷禪師が榻によつて扇子を使つてゐられた　すると一人の僧が禪師の前へ行つて、「風性

は常住なり、風は何處にでもあります、然るに貴僧は何故扇子を使つてゐられるのですか」と詰問した。此僧がかう云ふことを言ひ出したのには故事のあることで、楞嚴經の中に「阿難が佛に向つて、風の性と云ふものは形も何も無いもので、吹いてゐるかと思へば靜まり、靜まつてゐるのかと思へば吹き、定まりの無いものであります、と云つた、すると佛は阿難に、汝は、有るが如くにして無く、無きが如くにしてあるのが風の本性だ、その風の本性は世界中に周遍してゐるものだ、と云ふことを知らないと見えると云はれた」と出てゐる。この僧はこの言葉を見かぢつてゐたのであらう。風はどこにもあるのに扇子を使つて風を殊更に起すなどは愚なことだと云ふ樣に思つたと見える。麻谷寶徹禪師はこの僧の詰問にあひ、その偏執を憫れんで、「汝は風と云ふものの本性は何處にも有るものだと云ふことは知つてゐるが、その風性を働かし吹かすると云ふことを知らないと見える」。と云はれた。僧は早速「何故でせう」と問ひ返した。そこで麻谷禪師は難澁な哲理でも說き出して僧を提撕されたかといふに、然うでは無かつた。禪師は暑い眞中に汗みどろになつて事理を說きたてる樣なことは致されない、持つてゐられた扇子を使つて、いかにも心地よささうに冷味を酌んでゐられた。これを見た僧はもう云ふべき言葉も無い。虔んで禮拜して去つたといふことである。扇子を使はなければ冷味を取ることは出來ぬ。風と云ふものの本性は何處にも遍周してゐる。が然しその風は起さなければ風とならない。冷味は掬されない。

麻谷禪師のこのことは道元禪師の「現成公案」の結末の所に出てゐる名高い話である。

この話を「現成公案」の結論に引いてあるには深い意味のあることである。今日は議論の世の中で騷しいことであるが、昔も議論に始まつて議論に終ると

云ふことは往々あつた。佛法だ、眞如だ、法性だと云ふ樣なことを說きたて、本來成佛だ、久遠實成だと云ふ樣なことを論ずることが流行した。曩の話で云へば、風の本性は何處にも周布してゐるのだと云ふことだけを論じたてて喜んでゐる樣なことが流行してゐたのである。それを道元禪師は甚だ遺憾に思はれて、法は理論ではない。實修だ、行だ、と獅子吼せられた。卽ち風の性が周遍してゐるとか、してゐぬとかと云ふ議論よりも、實際に風を起して冷味を取るといふことが肝腎であることを體會せしめられたのである。

佛法は全く議論では無い。暑い時には扇子を使ふ。冷風を起す。その外には何んにもない。

道の枝折り

一　信仰

釋尊は吾等の慈父にして、又大導師なり。敎主なるが故に生生世世身命を惜まず。信順恭敬せよ。

釋尊は過去現在未來に於て常住不滅なりと雖も或る時は吾等が爲めに身を現じ說法度生し或る時は身を隱し救世利人し玉へるは、皆是れ佛の大慈悲神通光明と知るべし。吾等と共に居ると云ふ意識所謂佛と共に步行し佛と共に住し共に坐し共に臥す。一時一處も佛と共に居らざる事無き事を記憶し內的充實を企圖すべし。

信仰とは佛前に禮拜恭敬ずるは勿論なれ共唯にこれのみ信仰と思ふべからず。

個人的に社會的に佛の精神を實現し實行して實社會の中に活躍するを信仰の妙用と知るべし。行は信仰の表象にして信仰は行の根據なり。

二　思　想

今此三界ハ　皆此我有ナリ　其中ノ衆生ハ　悉是吾子ナリ　而今此處ハ
多ク諸ノ患難ノミ　唯吾一人ノミ　能ク爲ニ救護ス

の聖語に徹底し吾等の到る處は佛の境域にして一切人類は皆是佛の子なりと知り相互に患難を救護し、眞樂を享受し自他憎愛の妄念を除滅せよ。自己の生命は佛の生命にして佛の生命は自己の生命なれば吾等は吾等の生命を尊び形骸を空しく費やさざらむと努力する精神を保持し內容を充實する事が人生の目的である。此の目的に順ずるは善にして此の目的に反するは惡なりと知るべし。

佛性に卽ち自己の生命、家庭、社會、國家の生命なり。克己、勤勉、節約、儉約等は自己の生命にして、孝悌、貞潔、友愛等は家庭の生命、忠君愛國の如きは國家的生命である。此の生命を維持し向上進展するは、佛國莊嚴の實義と知るべし。

吾等は三世因果、善惡業感の規則に由籍て或は向上し或は退歩する事ありと知るべし。現在の自己將來の新世界を開托する勢力ある事を知り勤め止惡修善の操行を修習すべし。

四恩は佛恩と一如にして、四恩を感謝するは、佛恩を感謝することなれば行持報恩を忘るべからず。身は輕く法は重し、正法護持の爲めには身命を犧牲にせよ。（大正九年八月先師絕三をして書寫せしむ）

この活人劍

——我が國策の根本義——

一　人心不安

五ケ年の戰爭は長かつた。戰爭は悲慘であつた。然し平和克復の後の悲慘は、或る意味に於いて、その悲慘の程度が深まつてゐる。

オーストリヤは破產したと云ふ。數年前までは强のもの揃ひの歐州で、おしもおされもせぬ大帝國として威信兼ね備へてゐたものが、破產するとは何んたることであらう。ドイツはドイツで、國外からの壓迫と國內の貧苦とに、生きてゐるといふだけである。またロシヤは、革命に次ぐに革命で、火事場跡のやうな國になつた。悲慘は戰敗國オーストリヤやドイツ、またはロシヤだけにとゞまらぬ。戰勝國たる英國、佛國、伊國、米國、それらの國が皆悲慘な目にあつてゐる。外からは襲はれぬが、內が治まらぬ。ストライキが起る、暴徒が出る、財界不況の世界風は吹き回る、國民思想は日に日に惡化する。どの國もどの國も、上も下もサンザンなものである。

我が日本帝國も亦、同樣だ、世界烈强からは憎まれる、繼子扱ひにされる。默つてゐれば侮られる、抗議をすれば生意氣にといはれる。カリホルニヤでは排斥される、支那人からは馬鹿にされる、朝鮮には所謂不逞鮮人が續出する、不景氣風は吹き荒ぶ、會社は破綻する、農村は疲弊する、見ること聞くこと一として悲慘ならざるものは無い。この悲慘に面する人心の日に日に不安に荒び行く、また止むを得ぬことである。

二　この不安拭はるべきか

世界人心の不安、これが今日や明日に拭ひ去られやうとは誰しも思つてはゐない、然しまたこれが永恒に續くこととも思つてはゐない。ただ今日、人の切に冀ふてゐることはこの不安が一日も早く消えればよいといふことである。この冀求の聲が種々なる運動となり、列國ではそれ〳〵、爲政者、思想家、實業家等が先きにたつて骨を折つてゐる。我が國に於いても諸方面にこの運動が起つてゐる。近くは國際平和協會が出來て、我が國が外國人の云ふが如き野暮な國でないことを萬國に通じやうとしてゐる。また非官僚政治、國民外交、といふやうな榜語が、可なりの力を喚び起しかけてゐる。當局は當局で、曰く思想統一、曰く教育機關の擴張曰く常平倉、曰く何曰く何と、百方手を盡してゐる。斯くして今日の不安が取除かれやうとしてゐるのである。

が然し、これからの運動によつて、この不安が徹底的に拭ひ去られるであらうか、爰に矛は疑を挿んでゐる。疑を挿む所以は別事ではない、それらの運動を起してゐる人々が、何れも皆、大家であり、顯官であり、富豪であり、學者であつて、この埃の香の高い大地踏んでゐない人々であるからである。さういふ人々の起す運動は、大空の雲霓の如く、見た所は非常に大きくて、素晴らしいものであるけれども、どこかそこに力拔けのしてゐる所がある、これがために屢々企てられ屢々起されても、不徹底に終る場合が多い。

そこへ行くと宗教家は傑い。その運動は地味であつて底力がある。——最も今日の宗教家に就いて賛美してゐるのではない。矛が仰ぐ所の眞の宗教家、例へば最澄、空海、道元、日蓮、親鸞の如き、何れもその時代の人心の不安を拭去つた英傑である。その法孫は今に尙、幾千萬の人心の不安を定めてゐる。これ矛が所謂の大家、顯官よりも宗教家を傑いといふ所以である。

偉大なる宗教家が、人心の不安を拭去つたことを疑ふ人はあるまいが、然し「宗教家が拭い去る不安と今日の人が抱く不安と、その不安の性質が違ふ、今

日の人の心の不安が宗教家などの手に拭はれるものか」といふ人があるかも知れぬ。

ここに於て予は聲を大にして主張したい、何如なる種類の人心不安であらうとも、それを拭ふに姑息なことで滿足するのならば兎も角、徹底的やらうとする以上は宗教家に待たなければならぬといふことを。今然る所以を論ずるに當り、今日我が國の大問題たらんとしてゐる朝鮮問題に就いて、これを致さうと思ふ。

三　朝鮮問題の紛糾と其の來由

朝鮮統治問題は併合當初よりの問題である。案外平穩に併合された朝鮮が、その後になつて、所謂不逞鮮人を續出するやうになり、近年殊にそれが陸續として輩出するやうになつた。これは確に我が當路にその施政よろしきを得ぬものがあるからに相違ない。が然しこれは當局ばかりの非でない。また鮮人と共謀したといはれる基督教宣教師だけが悪いのでない。更にまた民族自決といふやうな旗印を與へて、竹槍太鼓で騒がした人を憎むべきでもない。當局の失政、宣教師の共謀、民族自決の美辭、それらが今日の統治困難の原因であることは云ふまでもないが、それでその原因の全部が盡きてゐるのではない。

矛は自ら朝鮮を視察したことはないが、然るべき人々の視察談や、種々の報告、殊に最近、中野正剛氏等の視察談を見て驚き且つ歎いた。内地人は鮮人を頭こなし馬鹿にしてゐる。彼地に移住してゐる内地人が、鮮人は不逞であるといふその言草を聞くがいい、「鮮人のくせに汽車で内地人に席を讓らぬ、癪だつたから打つた、打つたら怒つた、實に彼はけしからぬ奴だ不逞漢だ」といふやうな類である。何といふ愚にもつかぬ話であらうか。こんな工合であるから、日がたつほど鮮人が治めにくくなるのである。善人を悪人にして置いて不逞だ

不逞だといふよりも猶ほ惨酷である。で統治困難の原因の中には、この内地人の不謹慎を先づ筆頭に入れなければならぬと思ふ。然るにこれが多くいはれてゐないのはどうしたことであらうか。この一項は實に人格問題である。これが放任されてゐるとは何んたることであらうか。

四　基督教の烱眼

そこへ行くと基督教の人は烱眼である、直ぐこの人格問題を捕へて、自教の味方を作つてゐる。所謂鮮人の今日の不安を拭ひつゝあるのである。基督教宣教師は鮮人のために「理解ある親切な友」となつて、彼等の味方となりまた彼等を味方としつつあるのである。基督教の烱眼と努力とには毎もながら感歎せざるを得ぬ。

然し矛はこゝに憂ふる一條がある。基督教宣教師は「理解ある親切な友」として鮮人に「理解ある親切な言葉」を話しかけてゐるのであるが、その「理解ある親切な言葉」の内容は何んであるか、「神の前には帝王も奴隷も同列である、神の前には萬人同權である、今の社會の差別相は壞たるべきものである、お互は相互に人格の平等を知り、これを悅ぶに至る道をたくらまなければならぬ」といふの類である。内地人が人格蹂躙をなすを憤りそれを何よりも不平に思つてゐる鮮人に、宣教師のこの言葉は如何にうまく聞えるであらうか、本當に理解ある親切な言葉であると思ふに相違ない。が然しこの言葉は然く「理解ある親切な言葉」であるのではない。宣教師の言葉を悅び、これを行動に現はす鮮人は遂に亡ぼされなければならぬ運命にあることを信じ、予はこれを甚だ憂ふるものである。

五　基督教による鮮人何故に亡ぼさるべきか

鮮人にだけ限つてのことでは無いが、基督教を信ずる人は一般の人々よりも多少は目覺めてゐる。目ざめるといふことは非常に結構なことであるが、目ざめかたが誤まつてゐると、目ざめないよりも却つて危險である。これを人倫のことに就いて考へて見ても然うである、仁とか義とかいふ德目などは知らないで、そんなことを見る眼は開かないでゐて、然も仁とか義とかいはるべきことを任運に行る方が、危げがない。老子なども大道廢れて仁義ありといひ、仁者出でて不仁者を見るといつてゐる。といつて予は別段、無覺醒を推賞するのではないが、覺醒は餘程大事を取つてやらないと、覺醒した氣になつてゐて、事實は却つて寢ぼけてゐることがあるといふのである。

曩に予は基督教による鮮人は亡ぼさるるであらうといつたが、何故亡ぼさるるのかといへば、彼等鮮人は本當に覺醒することは出來ないで、寢ぼけてゐるからである。卽ち「人は神の前に平等であることだけを知つて、この現實の社會に差別が儼存してゐることを知らないでゐるからである」。

人は神の前に平等であるといふこと、これは甚だ心を惹付けられる言葉である。不平、不滿、不遇の人には隨喜渴仰せられる大福音であるに相違ない。然しこの言葉を文字通りに現實に徹底すれば、現代の世界は根底より擾亂されなければならぬ。幸か不幸か、基督教國ではこの言葉が、文字通りに遂行しやうとも致されて居らぬ。カイゼルと一非人とは同一に置かれてゐない。プリンスと平民とは同列に見られない。富豪と貧乏人とは平等に取扱はれてゐない。女と男とは同じものとされてゐない。基督教國でこの福音がその儘に行はれないとは不思議であるが事實であるから仕方がない。一體宗教の信條といふものには口にはやかましく云はれて、事實行はれてゐないものが往々ある。基督教のこの福音も亦、その類であるのであらう。が然し新に宣教師によつて、この福音を傳へられる新しい信徒には、その福音がその儘にその人の實生活に溶け込

む。斯して基督教國では卯の毛一本ほどの龜裂も惹起すことのできぬ福音が、新基督教國人などの上には大運動、大龜裂を生ぜしめる。鮮人の中にも基督教を信ずるに至つたことによつて、一時は救はれ、程なく永遠の亡びに陷るものが出かけやうとしてゐるのである。

六　鮮人の光明

施政よろしきを得ず、不幸、不滿、不安の間に呻吟する鮮人は、基督教によりて救はれんとし、却つてそのために累されんとするに至つた。政治、經濟、等に不安があつて、不平があつて、宗教に入り、却つてそれに累されるやうなことになつた。而して鮮人は今や益々不安にかられてゐる。

こゝに論じ來つて矛は釋尊が常不輕菩薩であつた時のことを思ふ、釋尊が今日世に出でられたならば定めし鮮人のために、眞に親切な理解ある友とおなりになつたに相違ない。釋尊が常不輕菩薩でゐらせられた頃の世の中は、恰度今のやうに、傲慢な連中が多かつた、そうしてその連中は自分一人が偉いものであるやうに考へて、他を蔑み、馬鹿にした、鮮人のやうに世のあぢけなさに泣き且つ憤るものも澤山に出た。そんな世に出られた釋尊はどうせられたかといふに、誰をも彼をも、これを立派の人格者として視、且つ尊重せられた。愚人を見ても、その人格を尊重し、惡人を見ても、その人格を尊重し、心の清いもの、心の不淨のもの、怒るもの、怒らぬもの、貪るもの、貪らぬもの、どんな人を見やうとも、それらの人々、智者は智者、愚者は愚者、貧者は貧者、聖者は聖者、知愚貧不貧はありながらに、而も本來より一等に具有してゐる此の人格――佛にも劣らぬ人格あることを認めて、これを尊重いたされた、といはれてゐる、今日の鮮人が斯ういふ人を一人半人でも得たならばどんなに心丈夫に感じることであらう。

吾等は釋尊の教子を以つて任じてゐながらこれを十分に遂行しないでゐるのは申譯けのない次第である。また釋尊は法華譬諭品の中に「今此の三界は皆是れ吾が有なり、其の中の衆生は、皆是れ吾が子なり、而も今此の處は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を爲す」といつてゐられる。彼を思ひこれを思つてたつてもゐてもたまらぬ感に迫られる。

七　唯我れ一人のみ能く救護を爲す

釋尊の「今此の三界云々」の語は法華一乘の法を示さるる時の言葉で、今此の三界といはれたのは勿論、この世の中のことである。この世の中を大きな邸宅に譬へて說かれてゐる。この大邸宅は頗る舊い家でその主人にその人を得ぬがためか、柱は朽ち梁は傾き、壁は落ち椽は脫け、雜穢物が充滿して目もあてられぬ。然しそんな邸宅であるに拘はらず、人も澤山住んでゐる、また鵄、梟、鵰、鷲、烏、鵲、鳩、といふやうな鳥、それから蛇、蝮、蠍、蜈蚣、蚰蜒、それからまた鼬、狸、狐、狼の類、その他樣々のものが巢くつてゐて、搏ち合ふ、嚙み合ふ、その殘虐さ、聞くだに身の毛がよだつ有樣である。一日のことこの邸宅に火がついた。猛火は炎々として焰の舌を吐く、毒蟲惡獸は猛り狂ふ、實に凄じい光景となつた。然るにその邸宅內に遊んでゐた屋主の子は、その難を避けやうともしないで、却つて面白がつてゐる。その父は百方手を盡してやつとのことで、その子供を救ひ出したと云ふことである。卿等よ、この一條の話をどう思ふか、世の中は今いふ邸宅のやうな恐ろしいものである、憂患の多いものである。が、これを救ふものは我獨りである。我れこれを救はずんば、この世の人がどうしやう。と仰せられたといつてある。

釋尊のこの信念、これあつてこそ、三千年の昔より今日に釋尊の光明は三界に輝いてゐるのである。法子法孫たる吾等は、この信念を仰ぎ、その萬一をで

も自ら護持し實現するやうにしなければならぬ。

釋尊にあやかり、吾等は「唯我れ一人のみ能くこれを救護す」と大精進すべき時は來てゐる。救護すべき獨り朝鮮のみでない、世界の不安、人心の不安、これを救ひ、これを安んぜしむるものは佛教徒たる各自自身でなければならぬ。

禪の信仰（終り）

308
346

昭和二年四月二十六日印刷
昭和二年四月三十日發行

禪の信仰
定價壹圓五拾錢

編輯者　丘球學　靜岡縣田方郡修善寺村
發行者　今村延雄　東京市芝區露月町十八番地
印刷者　瀧澤一郎　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所　東京市芝區露月町十八番地　鴻盟社
電話銀座四七〇二番　東京二九七九番　振替一仙臺六〇五三番